
俺の妹がこんなに可愛いわけがない 8巻っぽいの (地味子編)

ねりタケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の妹がこんなに可愛いわけがない 8巻っぽいの（地味子編）

【Zコード】

Z2343P

【作者名】

ねりタケ

【あらすじ】

あの日、校舎裏で黒猫から告白を受けた俺は、返事を返せないままにいた。翌日の夏コミ打ち上げでは色々とバタバタしたものの……黒猫と桐乃の喧嘩も収まって一段落……のはずが、赤城のバカが瀬菜と駆け落ちしてきて……一人を家に匿うことになり……

目指せ麻奈実エンドで書き始めました、他のことは何も考えない。とにかく地味子最高……愛していると言つても良い！

第1章 1（前書き）

黒猫から告白された俺は あの場で告白しなかつたことを後悔しているのかもしれない。あの時……俺はまた……選択肢を間違えたのだろうか？

7巻の続きのつもりで勝手に書いた。とりあえず地味子万歳。

地味子さんがかわいそうでたまらなくなつて、なんとか助けたいと思つ妄想のままに書いた。なのに地味子さんが出てこねー！ と怒られた。

至極最もなのでもつと頑張りつ。

今、俺の目の前で、彼女　瀬菜が、目を閉じたまま、俺の手を待っている。俺は、その重みを感じながらそっと抱き上げ、ベッドに横たえた。

「綺麗だな……」

思わず、そんな本音が漏れてしまう。俺の言葉に、照れたように頭をこてんと転がして顔を背ける瀬菜。

くそつ……可愛いじゃねえか……胸だつて大きいし……今着せられている服が薄手の夏物ワンピースというのもあって、体のラインもくつきりと浮かび上がっている。視線を逸らした先には、抱き上げたときにめくれたスカートの裾から、真っ白な足が覗いている。

透き通る肌つて、本當にあるんだな　そんな、陳腐な感想しか浮かべられないくらいには、頭がやられちまつたんだよ。真っ白なワンピースに、ふとあの日の黒猫の顔が、泣きそうな、真っ赤な顔が脳裏をよぎる。

罪悪感　　でも、仕方ないんだよ！　こうなつちまつたもんは！　もう……つ……遅いんだ……。

今、俺は自分の部屋で……何をしているんだ？　あまりに非現実的な光景に、何もかもがどうでもよくなつて、そのまま飛び込んでしまいたくなる……。

夢なら醒めればいいさ、でも、これは現実なんだ。今、俺の部屋で恥ずかしそうにベッドに横たわっているのは黒猫じゃなくて、こいつなんだ。

……どうしてこんなことになつたかって？　俺だつてわからねえよ。だけどさ……人生とか、明日つて、分からぬものだろ？　俺だつて……あの日の俺になんて言えばいいんだろうな？　……そう、あの日。俺は、確かに黒猫　瑠璃と　なのに……言い訳になるかもしけないが、あの日から今日まで、俺がどれだけ大変だつたか

聞いてくれるか？ そう、全てはあの日、既に始まつていたんだ。
だ。

そう……あの日、あの時、あの場所で……黒猫に、一度と解けない呪いをかけられた日 いうなることは、決まっていたのかもしない。

「私と付き合つて下さい」

「私と付き合つて下さい」

黒猫の焦燥につられただけじゃない、俺の鼓動が、はつきりと分かるくらい加速していく。こんな事態を考えなかつた訳じゃないし、いやむしろ…… そつだろうという予感は確かにあつた。そこまでバカじやねえし、前のこともある。それに いくら俺だつて、今が鈍感な振りをしてとぼけてばかりもいられない場面だと分かる。だけど こうして真つ直ぐに、なんの躊躇いもない告白を聞くと 笑えよ、膝が鳴りそうなくらい震えてるさ。茶化すような雰囲気じやない あの日、桐乃にからかわれたときは全く違つ。 「聞こえなかつたなら何度でも言つわ、その分呪いが強くなつて、貴方の呪いは……」

黒猫　いや、白猫か？　「ミケの時に着ていた服が、夕焼けに染まって真っ赤になつて。俺を見つめて真っ直ぐににらみつけるような、必死の表情が赤いのは、夕焼けせいだけじゃないはずだ……。

「一度と……解けなく……」
「多分……俺の顔も真っ赤だらうけどな……。

黒猫が俯いた両手で、自分の体を抱きしめて何かに耐えている。

「おい……」

「……」で男が何もしないわけにやいかねーよな？ いくらなんでもそう覚悟を決めて黒猫に歩み寄る。手を伸ばせば届く所で立ち止まると、黒猫が俺の顔を見上げ……普段の黒の装いとは違う口イツが、本当の妖精みたいに思えた。

「おい、そんな風に真っ直ぐに俺を見るのかよ？ おまえは、怖くないのかよ いや、こいつも震えてるんだ、俺と一緒に や、俺なんかよりもずっと大きめの覚悟で、ここに来たに違いない。

「黒猫」

「…… はい ……」

「さあ、何をすればいい？ 俺？ 分かってるだろ…… ビビッてんじゃねえ！ ありつたけの勇気を振り絞つて、俺は黒猫の震える肩にそっと手を伸ばす。今、踏み出せなきやならないのはビビッ考えたつて俺の方だろ？」

「……！」

「…… つ……」

手が触れる瞬間、黒猫と俺が、震えた。自分の姿を後ろから見ているような、現実じやないような…… そんな感覚すら憶える。自分の足が、今どこを踏んでいるのかすら全く分からぬ。そして……ああ、こいつの肩…… こんなに小さかつたんだ…… 桐乃と背丈は違う変わらないのに、あいつよりずっと小さえ……。

「あのわ、俺…………」

「……」

黒猫は、じつと俺の言葉を待っている。どれだけの時が過ぎたのか、それとも一瞬だったのか、それすら分からぬ。黒猫の震えは、いつの間にか止まっていた。瞬き一つしないのな、オマエ その顔をじつと見つめて、俺は…… 黒猫の瞳を…… ん？

あれ？ 今…… ちょ……。

「……」
「……」
「……」
「……」

えー……ちよ……。えー……。

「……な……何……」

気がつけば 僕の腕の中、と言つてもいいほどに俺と黒猫の距離が縮まっていて、その、彼女の向こうに。

「……」
「……」
「……」

「ど……どうもー？ みたいーな？」

「なんでいるんだよオマエはつつつつつつ……」

「……！」

校舎脇に植えられた生け垣の傍に、デバガメが1人、というか、瀬菜だ。……どーしてくれんだよこの空氣つ！ 滅茶苦茶いたたまれねえぞ！「ああああああああああ！」 責任取れっ！

「え？ あ？ あ、赤城さんっつ！？」

「あ……えつとね？ 視いてたんじゃないのよ！ ほら、なんか2人が珍しい時間帯にうろうろしてるし……私は、たまたま部室に用があつて……ね？」

あー……もういいって……つかどーすりやいいんだよ……俺……！

「その……先輩？」

「なんだよ……」

どう言つて良いか分からず、誤魔化すように苛立つた声を吐いてしまう。てーか、多少は怒つてもいいよな？ なんか瀬菜が怯えてるけど、オマエが悪いって。

「いえ……その……五更さんが」

「ん？」

いつ……今気がついたけど俺！ 黒猫のこと……抱きしめてたの

かよつ！ いやまた、その、これはだなつ！ あんまりのことでビックリしてだなつ……断じて黒猫が白猫になつて夕日に染まつて幻想的で可愛いなーなんてエロゲちっくなこと考えてたら思わず抱きしめちつやたとかそんなことは一ミリたりともないんだからつ！

「……その、ちょっと痛い

「す……すまん……」

相変わらず真つ赤なままの顔をせりて俯かせ、ますます縮こまつてしまふ黒猫……。うつう……俺だつていたたまれねえよ……どーしろつてんだよこれ！ やつぱり責任とつてよね！ ……そんな俺のいたたまれなさをくみ取るかのよつて、黒猫が俺の胸を押して俺から離れる。

「まつたく……どうしようもなく俗な連中ね……」

「つつ……『免なれ』……」

あー……瀬菜のヤツ、流石にちよつとは反省してゐみたいだな……しかし、どうせなら最後まで隠れてるとか、うまく空気を読んで欲しかつたぜ……。あと、連中つて誰と誰よ？

「悪かつたわ、その……五更さんも、『めんなれ』」「いいえ……いいわ、気にしないで。別に恥ずかしいことをしたなんて思つてないし、隠すような事じやないし……そうね、隠してたらこけないのよ、」うつこつ事は

俺は無茶苦茶恥ずかしいんだけど……エロゲ買ひに行つた時よりも辛いぞ。これより恥ずかしかつたのつて、お袋や麻奈実に秘蔵のブツを見られた時ぐらいだぜ……いや……そん時よりキツいかもしけんくらいだ。

「ああ……そうだな。瀬菜も、怒つてすまなかつた。ちよつと言ひ過ぎたよ」

「そうね、女性には優しくしておいて損はしないものよ」

いつも通りの、お居がかつた口調の黒猫。どうやら少し落ち着いたようで、先ほどのような強ばり見られない。

「はいはい、俺が悪かつたよ、今日のとこは……な

「……いいえ、そのまま聞いて」

え？

「「え？」」

ちょっと、おま、何を。

「もう一度言ひわ……私と、付き合つて下せこ

ええ あの……。

「貴方のことを……貴方のことが、好きです」

あの…………あなたの同級生の赤城瀬菜さんが…………ものす
『一おく居心地悪そなんですが…………何とかして上げて……い
やマジで……なんつーか、あんまりオロオロしてるので、こつち
が落ち着いて来ちゃつたよ。

「ありがとうな、黒猫」

「…………本気よ」

「だらうな、こじまで言わせて『からかうなよ』なんて言ひほび俺
は駄目な男に見えるか？」

「ええ、割と」

「せりじと酷いね！」

「でも、それでも好き」

…………すいませんもうマジ勘弁して下せこ…………。

瀬菜のヒットポイントはとつべじゼロよ……俺もだけビー

まあ……。

「分かつたよ、おまえの気持ち……ちやんと届いた」

「…………そう」

「でもれ……その、流石に今こじで返事しきつてのは勘弁してくれ
ないか……俺じゃなくて、あいつが憐れすぎるわ」

もう何も言えずにつづたりしている瀬菜を見ながらとう答える…
うーん、自業自得だと思うけどな？ オマエの場合。とこつても
流石にそろそろこの場から逃がしてやらないと……俺も辛いし、黒
猫だつて……多分、今は強がってるけど、ギリギリのはずだ……ま
るで、誰かさんみたいに。」

「分かつたわ」

「ああ……ありがと」
「はあ～～……」

露骨なまでに息を吐き出して倒れ込む瀬菜。おーおー……ひょりとして今の間、息を止めたのかよ……気持ちは分かるナビ。

「大丈夫かよおー」

「なんとか……まあか、こんなことになるなんて……」

「ふ……フン、どうせ、私の弱みを握つてからかおつとか思つてい

たんでしょ……いーザマね」

「もう好きに言つて、反省してるわよ……悪かった」

流石にいじめすぎだらうよ……とことんうだよなあ……「イツ。桐乃とはう同士だからだらうな……ああいう風になるんだつてよく分かるわ。

「その辺にしておこしてやれよ、いーつだひてこんな事になるなんて思つてなかつたひうしち」

良かった、俺もだいぶ落ち着いたみたいだ……なんだかホッとしたような、残念なような気持ちではあるけれど、笑いながらこいつらと話せる余裕が生まれたのを感じる……うん、もう大丈夫だ。

「瀬菜も……流石にグロッキーか?」

「そりや、まあ……そうですね……とこ'うか……」

「なんだよ」

「本当に付き合つてなかつたんですね……むしろ、やつちの方が驚きですよ」

チツ…… そういや、真壁君にも同じようなことを言われたな……やつぱやつ見えてたのか……しかし麻奈実のことと言ひ、黒猫のことと言ひ、この兄妹もトコトコ勘違いばかりしてやがるな。

「黙つとけよ?」

「さすがにこんなこと誰にも言えないですよ……全く」

「残念だつたな、俺をネタに妄想できなくなつて」

「いえ? 振られる彼女と本命の彼つてのは鉄板ネタですからアリ

ですよ？ 何言つてるんですか

「つんむつむえ喋るな。

「分かつてると思つけどせ」

「ええ、分かつていますよ……ゲーム研の仲間には黙つていてます

「助かる」

「そうね……その方が良いかも」

俺の言葉に、黒猫も同意してくれた。

「でも、できたら早めにはつきりして、みんなには話して下さいね？ 五更さんそれなりに人気あるし、つやむやなままだと色々困りますから」

それは知らなかつたな……てつきり、真壁君と一緒に、おまえが田当でだと思つてたよ。

「やつするよ」

「意外ね、貴方のことだから……『不純異性交遊は校則で禁止されています！』なんて、お約束を言い出すと思つていたわ」

あー、なんか復活したっぽいな、黒猫。でもオマエの物マネ似てないからな？ 麻奈実の声マネの時もそつだつたけどさあ……でも、桐乃のマネは魂入つてたか。

「そんなこと言ひません！ 第一……そんな校則うちにはありますから！」

「へー」

「そこの？」

あー、そなんだ。あると思つてたよ俺、といつか一度も校則見たことないかも。つーか誰も見ないだろアレ……読んでたおまえが凄いよ。

「まったく……それにもしそうだつとして……」

「何よ、まだ文句でも？」

「いいえ……？ 五更さんの言つた通りよ『別に恥ずかしいことをしたなんて思つてないし、隠すような事じやない、貴方が大好き』なんでしょう？」

わー……てか「大好き」なんて言つてたっけ？ でも口調も声もそつくりだようん、これは褒められて良いレベル。俺も真っ赤だけど……直撃受けた黒猫が固まっちゃつてるからせー……もうね。

「あら？ 恥ずかしくないんでしょう？ 格好良かったわよ」

「ヤーヤと笑いながら黒猫にからむ瀬菜……。

あー、これ仕返しか……照れ隠しも入つてそうだけど……やれやれ……どうして俺の周りはいつも面倒臭いヤツばっかりなんだろ？

「んなつ……な……」

あー、流石に、再現されると辛いよね……つん、分かるよ……。

俺もいたたまれねーもん……。

「それじゃあ、失礼します。先輩、五更さん……」

ああ、とつとと帰りやがれよ。

「おう、じゃあな。気を付けて帰れよ」

「ありがとうござります。お一人も……その、良い旅路を「んー、なんかまだ、アイツもちょっと変だけど大丈夫そうだな。やれやれ……今のほんの数分……もつとか？ 全然わかんないけど、とにかく緊張したよ！ 色々！」

「はあ……やつと行きやがったな……おい、おまえは大丈夫なのか？」

「ふ……ふん、何でもないわよ」

いや結構キテるだろ、おまえ……俺が言つのも変だから言わないけどさ……よく頑張ったよ。

「送つていぐよ」

「そうね……もう暗いし。夜の眷属である私にはなんてことは無いのだけれど、エスコートさせてあげるわ」

「へいへい」

キャラ戻つたな……実は照れてるんだな……俺もだけどなつ……でも、その方が不思議と落ち着くよ。

「ほり、行くわよ……」

一人並んで、校門の方へ歩き出す。なんか、いそばゆいけど……

「いつもどおりかしい空氣も悪くないな。

「なあ、黒猫……さつきの話だけじと

「何？ 今更すぐ返事するとか言われても……今度は私が困るわよ」

「ははっ、正直だな。おまえの顔 サキとおなじくらこ真っ赤

だぜ？ 夕焼けが沈んだつてのに、はつきり見えるくらいにな。

「ああ……分かった。はぐらかしたり、誤魔化したりしないよ。ち

ゃんと考えてから、俺の気持ちを話すよ」

「ありがとう」

服が変わったせいもあるのか、なんだかすっかり白猫になつてしまつたなあコイツ……なんて考えながら歩いていると、俺の手を黒猫が握ってきた。小さくて……柔らかくて……ホントに華奢な手だ。不思議と……驚かなかつた。そうなるような……そうするような気がして、その手を握り返していた。どっちから手を出したのか、分からないくらいだ。

そのまましばりと無言で歩いて、黒猫の家の近く……下校の時いつも別れる交差点まで差し掛かったところでその手がほどかれた。

名残惜しくて「じやあな」と言えない。汗ばんでべたついた手のひらが熱を持つて 愛しい。疊いた手の代わりに、さつきの言葉の続きを絞り出す。

「返事、だけじと……そつだな、夏休みが明けるまでにきみちゃんとするよ」

「そつじてちようだい。あまり長く引っ張られても困る……第一、どんな顔をして貴方や『あの子』に会えぱいにのよ」

「そつだな」

あたりはすっかり暗くなつて、夏の熱氣を忘れるような涼風が吹いていた。……もうすぐ、夏も終わりか……。

「分かっているわ、迷っているんでしょ」

「……」

「でも残念ね、私はあの悪魔と違つて貴方を逃がすつもりも甘やかすつもりもないのよ？」

「なあ、黒猫……さつきの話だけじと

「誰だよ悪魔つて……とか勝手に迷ひたるとか言つたよ？ 今なら、俺はさ……。」

「逃げたりしねえって」

「ならいいわ……返事は急いでと言つたけれど、今日はやめて頂戴「急ぐんじやなかつたのかよ」

「明日、打ち上げでしよう？ 流石に……その、いきなりはね「あー、やうこやうだつた。さつきの騒ぎですっかり忘れちまつてたよ……そら色々氣まずいわな。

「ははっ、そりやそりや……分かつたよ。じゃあ……また明日な、楽しみにしてるぜー！」

「ええ……また明日……おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

黒猫は、信号が変わつたところで交差点を渡つて帰つて行つた。家まで送つていけなかつた五秒前の俺が歯がゆくて……そのまま黒猫の背中が見えなくなるまで、交差点に立つていていたさ。あいつが、一度も振り返らなかつたのが……ちよつぴり残念だつたけど、すぐ満たされた気分だつたよ。

しかし……「おやすみ」とは言つたけれど……寝るにはまだ早いなあ……てかや、多分俺……今日寝られないぜ……どうしたらいいんだらうな……。

「ま、後で考えるか！」

そう独りじちで、そのまま全力疾走で家まで帰つた。体育の時間以外で走る事なんて無いんだが……何かじり、モヤモヤとか湧いてくるものとか……色々……で、たいした距離じやないのに、家に着く頃には汗だくで吐きそうにグロッキー……でもか、こんな気持ちのいい疲れや汗なら、走るのも悪くないな。……タマにならな？……あれ……どこかで……こんな感覚……ははっ、ねーな。俺の体育の成績なんて中の下だし、体育祭だつて3位か4位、よくて2位だからな……どとかの駿馬とは違つんだな、きっとさ。さて……シャワーでも浴びて、今日はとつとと寝るか……。明

日は打ち上げだしな！ つたく、今年の夏は色々ありすぎて疲れる
な……まったく。

第1章 1（後書き）

7巻から後の展開を勝手に妄想して書きました。

4章予定の4分の1だけとりあえずアップ……頑張つて、一週間1章ペースでやつていけたらいいなあ……とりあえず、地味子さんこと麻奈実のためだけに書いてます。

妄想、願望なんでもござれ、勢いだけで推敲もしてないような拙作ですが、麻奈実のために泣いていただければ、作者が浮かばれます。あと、ネタバレも盛大に含みますので注意。

……
麻奈実
……

第1章 2（前書き）

桐乃達の喧嘩のせいで流れてしまっていた打ち上げのやり直し……
ところが、沙織が思いついたゲームのせいで、俺達はとんでもない
ことに！

……つていう妄想で書いた。反省はちょっとしかしていない。

「では……改めまして、夏口!!の打ち上げを始めるで!!」
それでは、皆様……この度の完売を祝いまして……乾杯!!」

「……かんぱーい!!」

……という訳で、こないだの喧嘩で流れちまつてた打ち上げのや
り直し……こないだの時と違つて、桐乃も黒猫も特に変わった様子
もなく、多少きこちないような気はするけれど、こいつらが喧嘩
した後つていつもこんなんだつたなあ……と思えばまあ想定内だ。
むしろ、今日の打ち上げでいつもみたいにガンガンやり合つてねば、
また調子も戻つてくるだろ!!さ。

「京介殿、ちとお疲れのご様子ですが……ようしかつたのですか?」
「ん、いや……昨日はだいぶ涼しいかなーと思つて窓開けてたらさ、
やっぱ寝苦しくつてさあ……網戸の隙間から蚊も入つて来るわで」
結局、昨日はほとんど寝られずに悶々として過ごしてしまいました。
パーティー開始早々に沙織に心配をかけかけまつくりこには、寝不足
つてわけだ。

「ははあ、それはよろしくない。まだまだ暑いですからなあ……夏
バテには気を付けませんとー」とりあえず、この辺のお菓子など栄
養が付きそうです?」

うーん、なんだそれ、その「一ソーサクワサビスペシャル」つて…
確かにスタミナ付きそうだけど。

「うわ、なんか臭そー……アンタそれ食べた口で喋らしないでよね
相変わらず俺には容赦なく酷いねオマエ。」

「……つーか……『レ買つてきたのオマエじゃねえか……』なんぞそんな文句が出るんだよ！」

「え？ だつてめるカード付いてるし」

うん、分かつてたけどね。だつて袋にめるちやんとタナトスが描かれてるし！

「低俗ね……こんな幼稚なオマケに群がるなんて、むしろ可愛らしいうべきかしら？」

「はあ？ マスケラはこういうの出してもらえないからつて僻まないでよね！ 幅広い層に受けてるからこそ、お菓子にもなるんじやん。子供にも大人にも受けたるのがアニメの良いところでしょ？」

相変わらずだねおまえら……苦笑しながら袋に手を伸ばすと、向かいに座っていた沙織と目があった。「いつも通りでござるな」「ああ……よかつたよ、ありがとうな」不思議と、コイツとは言葉が無くとも通じ合えるんだよな……実の妹とは全く全然欠片も通じ合えないのにな！

「ははは、お一人ともそう言わず、とりあえず食べてみない」とこは……意外と美味しいですぞ」

「ん……カロリー高そだだから……ちょっとだけなら」

いやだから買つてきたのオマエだよね！

「あら？ 夏太りでもしたの？ 大変ね……」

「しねーつての、アタシは運動もガンガンやるし、カロリー計算だつてしつかりしてるつての、モodelなめんな」

うん、その辺はコイツしつかりしてるんだよなあ……基本、お袋が作つたものは残さず食べるし（残すと親父が五月蠅いし）。お袋の料理はまあ……並……やや下……まあ、得意じゃないんだろうけど、カロリーまで考へてるわけじや無いしな。……そもそも朝からカレーと味噌汁出してくるし、小学校の時なんか、うつかりその事を話しちまつて結構笑われたんだぜアレ。……その事をこないだお袋に愚痴つたら（2日続けてカレーだったつてのもある）……

「何言つてるのよ？ 最近流行つてるのよ朝カレー、スパイスが体

を刺激していいんだつてば！ 時代が私に追い付いてきたでしょ？

……なんて言つてやがつた。……明らかに違うと思います母上様

お元気すぎです。

「まあ、おまえらみんな細いからな、多少食つて太つてもいいんじやね？ むしろ細すぎるだり」

「うわ……キモ……あんた、妹の体のラインとか、なに普通に批評してんのよ……」

「……私は、多少食べても妖力の維持にエネルギーを消費するから……問題ないわ」

「ああ……せいですかよ、つたく。でも男受けのする体つてのは、は、もう少しそっぽっちゃりしてるほうが良いんだぜ……例えば……うーん……瀬菜とか、麻奈実みたいなね？ そんな事を考えていたら、意外にも沙織から諭されてしまった。

「京介殿、男性の理想と女性のその違いは拙者も理解しておりますが、それを言つのは無粋といつものです」

「あー、よく言つよねえ、それ……。麻奈実に何遍も言われたわー……。そうだなあ……確かに俺だつて、細くても……あやせたんみたいなスタイルならばっちアリだし。

「そうかもな……すまん、悪かったよ」

「ちなみに、拙者の体はモデルよりもグラビア向きのサイズゆえ、じっくり眺めて貰つても問題ありませんし、堪能して頂けますかと」「ブフウツ！」

吹いたじやねーかてめえ！ いきなり何言いやがる……突っ込もうとした俺の目の前で、沙織がしなを作つてニヤニヤと笑つている。くそ……確かに、藤原紀香と同サイズと言つだけあつて……かなり、色々良いよな？ つーかおまえ、中学生として色々反則だよ！？」

「サイテー……」

ドスの利いた低い声で桐乃が睨んでくる。……今の、やっぱ俺が悪い流れかよ……やれやれ。まあ、俺が患者になつておまえらが楽

しんでくれるなら、それはそれでいいさ。

「はい……大丈夫？」

「ん……ありがと……え？」

「……！」

何気なく左側から差し出されたハンカチを受け取ったけど……なんか「大丈夫?」とか優しく言われるのって、珍しくないか……そう思うと、昨日のことが思い出されて、顔がカツと燃え上がりそうになる。……そーだよ……俺、昨日告白されたんだよなあ……誤魔化すようにハンカチで口元を拭う。黒猫らしい趣味の、刺繡の入ったレースのハンカチからちよっぴり良い匂いがして、……正直戸惑う。

「……」

黒猫の反対に座ってる桐乃が……なんか不機嫌だし……いや、いつもこんな感じと言えばそななんだけだ。

「すまね、洗つて返すよ」

「いいわよそのくらい、汚れを拭くためのものなんだから」

「そか、悪いな」

「……貸しなさいよ、アタシが洗つといてあげるから」

桐乃が俺の手からハンカチを奪い取つて、自分の机の椅子の背にひっかけた。洗つてくれるのはいいけど……もーちつと素直に言えばいいのに。

「そう……ありがと」

一年以上の付き合いでそんな桐乃の態度にもすっかり慣れた黒猫は……今日はいつもの「スローリ服で、黒猫に戻つていた涼しい顔でオレンジジュースをちびちびと飲んで笑つてている。心配してたけど……仲直りしたつてのはどうやらホントみたいだな……これで一安心つてところか。

「さて、それではそろそろ余興と行きますかな……皆様、こちらをご覧下さい」

沙織が、手に割り箸をとティッシュの空き箱を持って得意げに笑

つていて。「何？　またゲームでもすんの？　……あ、もしかして

……それ……」

「申し訳ないけれど……脱衣モードは勘弁して貰えないかしら……」

「うん、俺も勘弁。ところがあの時一方的に被害を受けたのは、対戦者のオマエラジやなくて俺だったよね！　言わないけどさー！」

「（安心めされ、それにこの部屋のモニターでは、ポリゴン対戦格闘をやるには少々画面が狭い）ぞりますし」

確かに、パソコンのモニターで対戦もできなくはないけど、できればもうちょっと大きい方が良いかな……特に、ジョイスティックとか使う場合はなあ。

「んで、何やるんだよ？」

「よくぞ聞いてくれました京介氏……（こ）は拙者、色々悩んだのでござるが、やはり基本は王道、お約束なゲームをしてみよつと思つのです」

「はー、何を言つているのかよく分からんから本題を言つてくれ。

「もつたいたいぶらないで早く言いなさいな」

「うん、俺も同感。

「はは、手厳しい……まあ、ざつくり言つと……きりりん氏はお察しの（）様子ですが、王様ゲームですよ」

「ああ、聞いたことあるあるー。クラスでも合コンとか好きな一部の男子がよくやつてるつて言つてたなあ……正直、ちょっと憧れとかもあるな。だって俺、なんでかしらねーけど、絶対合コンとかの類に誘つても「えなこ」……。一度、勇氣を出して頼み込んだら

「……ああ……いや、そのオマエはなあ……悪いけど。……に悪いし」

「……とかつて断られたんだぜ！　どつちかつーと垢抜けて無い自覚はあつたけどさ、ああいう風に断られるとショックだよ……。

「聞いたことはあるけれど……あまり興味は湧かないわね。第一、アナタはそんなのもう、厭きているのではないか？」

「誰が……つて、この中でそういうの経験ありそうなのは……」

……桐乃しかいねーわな。最近あんまり行つてないみたいだけど、昔は時々モデル関係や学校の友人達と一緒にそういうところにも顔出してたみたいだし。

……親父に知れたらH口ゲ騒ぎの再来だぜ……幸い、お袋が秘密にしてくれてるみたいだけどな……ん? なんかお袋、桐乃の秘密は黙つてるつてズルくね! ? いまさらだけど……本氣で田村さん家の子になるぞ!

「それなりにはやつてるけど、別に興味はないからどうでもいいわよ……ただ、H口男が混じつてるのがイヤ」

俺だよねそれ! 男俺しか居ないし! でも、さつきからの目線とか手つき見ると、俺より沙織の方が危なそうな気がするけど……気のせいいか?

「まあまあ、実は拙者も一度やつてみたかったのですよ……」

俺も! しかし……こいつの不機嫌そうな桐乃や、H口親父スロットル半開きの沙織はおいたくとして……黒猫の方を見ると、やはり不安そうに……というか、沙織の様子にやや引き気味だ。うーん、だよなあ……。でも、俺ちょっとやつてみたいんだよなあ。いやいや! H口田的とかじゃなく! 単に興味本位だよホラ! それに、大学入つたらこういうのやることになるわけで、やつぱぶつつけ本番より恥かかなくて済むし!

「京介氏は乗り気のようだ! さるよ? やはり男の子ですか……」
いやいやオマエ、何勝手に俺の心代弁してんだよ! 8割くらいしか合ってないよ!

「うわ……サイテー……」

「はしたない粗大ゴミね……」

とうとう生き物ですらなくなつたか! というか後者黒猫、おまえ昨日俺に告白したよね? それも激甘なやつ……あれは俺の妄想だつたのかよ! なんか……何もかもが信じられなくなつてくるぜ。

……
「そんな京介氏の期待を裏切つて申し訳ないのですが、やはり拙者

達もつら若き乙女で「Jギルドからして、あまり口口なのは困ります…もとい…えつちなのは…いけないと思いますよ?」

いや、しねーから、そんな命令…H口ゲじやないんだから。

「そこで、拙者は考えたのでJギルド…命令を拒否する代わりに、まあ、いわゆるギブアップした側ですな、負けた方は、勝った方が言わせてみたいアニメの台詞を言わせてみるというのはどうでJギルド」

時々沙織と日本語通じなくなるな! 何したいのかよ一分からん…やつき通じ合えたのは錯覚かよ!

「なるほど…つまり、恥ずかしい台詞を命じて、赤面して悶えているところを見て嘲笑すれば良いといつ訳ね…それは面白やつ」「へー、ちょっと面白いかも」

あ、一人がいきなり乗り気になつた。なんだかんだ言つてオタクだよなあ…こいつら。

「大学などでは、杯を干すなどの罰ゲームがよく用いられるそうですが、我々は未成年ゆえ、知恵を絞りました」

なるほどな、沙織のこいつ、「みんなをなんとか楽しませよう」つていう気遣い、俺は凄く好きだな…アメリカへ行つてしまつたところのコイツのお姉さんも、きつとこんな感じだつたんだろう。

「でもわー、俺、あんまりアニメ詳しくないぜ?」

「その辺は申し訳ないでJギルドが、一人男性が混じつているのですから、役得の代償のハンデと思つて頂くしか…。なんなら、映画やドラマの台詞でも構いませんし、このティッシュの空き箱に拙者厳選のセリフと罰ゲームを入れておりますのでJギルドを使って下され」

「ああ…それでいいなら、構わないぜ」

「ありがとうございます。その代わり…と言つてはなんですが、多少Hツチな命令を出しても構いませんよ?」
出をねーつて、つたぐ。あー…なんかまた桐乃が蔑んだ目で見

てるし……。おまえは兄貴をどんな目で見てるんだよ？……
いや、セヒ、ほら、あの時の件は俺が全面的に悪かつたけどさー。
流石に妹にやらかしちまうかもしれないよつた場面でエロいこと
言わないって！

「へいへい、いいよそれで……おまえらは？」

両隣の二人 既にやる気十分の様子だったが、一応水を向けて
みる。

「望む所よ……めるるの変身の呪文、振り付けてあげる
わ」

「ククク……アナタが馬鹿にした厨二病台詞を必死で口にするとい
うが見られるなんて……愉快ね……バジーナ、録音はあり？
携帯を取り出す黒猫と不敵に笑う桐乃……鬼だコイツら、しかも
自分が負ける気は全くないらしいな。

「流石にそれは……相手が良しとすれば、ということで」

「アタシは良いわよ？ 別に。むしろ残して笑ってやりたいし。ア
ンタちょっとカメラ持ってきてよ、こないだ買つてきたヤツ」

「ああ……アレね？」

「うん、そーだよ。オマエ（黒猫な）と一緒に買いに行つたヤツ。

「なんでも良いから早く取つてきなさいよ」

「へいへい……録音は、おまえのユーロロロ使つの？」

「え……」

「いや、押し入れにあつたヤツ」

「あ……あれは……その、録音できないし、古くて電池切れてるか
ら」

「あ、そーなんだ。しかし我が妹様はほんとナチュラルに俺を使つ
てくれるなあ……。」

そして、隣の自分の部屋に戻つてカメラを持ってくると、既にテー
ブルの上は片付けられ、準備万端といった様子になつていた。

「おお、京介氏、準備は出来申した…… さあ！ いくでガンスよ

！」

戦いが始まった。

「……では、2番が3番にしていいペ」

「あー、3番拙者でいいぞ！」

「2番は私ね、ほら……手を出して頂戴」

「ぺしつ。なんか可愛い音だな。

「じゃあ次……王様はアタシね！　ええと……1番が3番の肩を揉む！」

「あ、1番俺だ。

「俺、1番だけど3番は？」

「私よ……ちゅうど肩がこつていたの、お願ひするわ

「へいへい……つて、なんで命令したオマエが睨むんだよ桐乃……。しかし、そろそろ2巡したといつのご、なかなか盛り上がりしないな……まあ、理由は分かってるんだけどさ。いつ、口では『カイ事言つてもやつぱこいつら女子中高生なんで、命令が一々可愛げがあるというか……簡単なんだよ。だから、罰ゲーム以前に、危機感もないわけで。俺？　いや、やつぱほら……ああは言つても……自重しどかないとなあ……決して「命令されたら仕方ない」とか思つてないし！」

「次は……あ！　またアタシ王様！　今度は……ええと……えと……1番が王様の肩を揉む！　やつぱ王様が偉そつにしてこるべきよね、うん」

「さつきと一緒にやんよーその命令……。まあ……すぐ思つてくれうな命令しか出てないんだけどさ。

「拙者で『ざる』な、それでは……失礼」

「え……あ、うん。……えと、よろしく」

「何がつかりしてるんだよ、そんなに黒猫をこき使ったかったのかよ……ホント、仲良いんだか悪いんだか。

「ふうむ……イマイチ盛り上がりませんな」

「桐乃の肩を揉みながら沙織がポツリ……あ……言つちやつた。

提案者が言つちゃつたら駄目だろそれ。

「……」

「……微妙ね」

「ま、まあまだ始めたばっかりだしな?」「

俺のフォローも、いまいち気持ちがこもらない……まあ、実際微妙だしな。

「しかしきりりん氏、肩が凝つておりますな……兄妹揃つてお疲れか?」

「ばつ……バカなこと言わないで! わ、私は、コイツと違つて毎日朝練とかあるの!」

……? 何真つ赤になつてんだよ。知つてるつてば、頑張つてもんなー。俺ラジオ体操より早起き絶対無理、麻奈実みたいなおばあちゃんは……早起きらしいけど。

「それは失敬……しかし、揉みがいのある肩ですぞ。肌もすべすべで……」

おいらそここのセクハラ大魔神、セクハラの先輩として命じるが、今すぐ人の妹に対する不埒をやめるんだ。……つたく……これが同性の沙織だから良いようなものの……いや、待てよオイ、桐乃はこんな事してやがったのか!? 御鏡とか、あの辺の仲間とかと……なんか、ムカつくな……。というか、桐乃も顔赤くしてんじやねーよ。また風邪でも引いたのかつてくらい赤いぞ。

「オイこらそここの変態、その手つきはエロいぞ」

「いやははは……つい、熱中してしまいました……しかし、少々手ぬるう!」ざいましたな。次からは、多少厳しくしていきましょう……いざとなれば、台詞に逃げられるわけでして

あ、そーだな。そう考えれば、さほど気にしなくてもいいか……タガの外れた俺を舐めるなよ、オマエらー!

「じゃあ……次からハードルあげていこうぜ、構わないな?」

「そうね、このままじゃこの女の無様なすがたが見られないし……

「ハ、それはアンタだってーの!」

はいはい、座れ座れって……いくぞホラ。クジを握つた俺の手から、それぞれにクジを引いていく。……で、王様誰だ？

「拙者ですな……それでは……」

2番と3番が両側からポッキーで

「ブフウ ッ！」

「えええつ！」

「んなつ……」

また吹いちまつたじゃねーか！ いきなりハードルあげすぎだこのバカ！

恐る恐る手のクジを見ると……1番……ガツカリナンテしてないよー？

で、2番と3番は……？

「……つ」

「ほ……ほり……早くしなさいよ……」

桐乃が、顔を真っ赤にしたまま身を乗り出し、ポッキーを咥えて顔を突き出している。

「そ……そつちこそ……覚悟は良い？」

「は、言つてろ」

器用に喋るね我が妹よ。俺の目の前で、妹と後輩がキスしそうな配置でポッキーの両端を咥えている。んー……シユールだなあ……。

「それでは……ガンダムファアイツ、レディー……ゴー！」

沙織の合図と同時に、一人が両側から囁り始める。てか桐乃、おま勢い付き過ぎじゃね？

「ほりほりじうしたの？ 怖いの？ ネンネねー！」

女の子がそういうこと言つた、てかおまえポッキー咥えたまま挑発とかホント器用だな！ ひょつとして慣れてるんじゃないだろうな！ なんか駄目だろそれ！ お兄さん許しませんよつ！

「んむつ……」

「」 ちは黒猫、端からちまちまと……ゆっくりとだが進んでいる。うん、これが普通だよな。既に半分近くを食べ終わった桐乃は、勝ちを確信したのか余裕の表情……てかおまえ、勝利条件間違つてるっぽいぞ。

「」

とか考えてるうちに、桐乃の唇が待ち受けるほん……2センチのところまで……ていうかもうキスしてるようにしか見えねーよ！

「いや……ははは……正直、照れるでござるな」

見てるだけでキツイなこれ、桐乃の向かいにいるのが御鏡とかだつたら、はつ倒してくるわ。……あ……

「」「」「」「」

ガシャー！ と音を立てて、俺が持つていたコップが手から滑り落ちた。結露して濡れていたとは言え……見入りすぎてしまつた……いやだつて、ホントヤバイんだつて、二人とも顔真っ赤だしやば過ぎエロ……！

「京介氏……大丈夫でござるか？」

今度は、沙織がティッシュ箱 桐乃の部屋にもとからあった、動物のカバー（茶色のカバ）のやつを手渡してくれる。

「ああ、すまん。うつかりしてた……コップは割れないし、中身はそんなに残つて無かつたから大丈夫だ」

「それは何より……あ」

「あ……」

「あつ……！」

ん、ああ……今のショックのせいか、二人の間にあつたポッキーが見事真つ二つになつて折れていた。

「こういう場合は……どうなるんだ？」

「うわ、なんで俺を睨むんだよ桐乃！」

「ふうむ……京介氏に責任を取つて頂いていいのですが……それもなんですし……」ここは一つ。両者失格と言う事で、きりりんさん

と黒猫氏に一人で台詞のかけあいなぞしていただきましょつか

「仕方ないわね」

「アンタのせいだからね！ 憶えてなさいよー」

知らん。

「では…… そうですね…… ファーストから行きたいといひますがお二人はまだ若いですし、平成からいきましょつ」

いやほんと年だから、つかやつぱりガンダムなのな。

「ガンダムX第1話、ジャミル・ニートの名台詞をやつていただきましょう…… きりりん氏は女性クルー側をお願いいたします」

「ずいぶん差があるんだけど…… まあいいわ」

えー、今ので分かるの？ 僕ガンダムちょっととは知つてるけど聞いたことないよ。てか、黒猫も赤いけど…… 桐乃是さらに真っ赤だな…… 沙織め、どんな台詞を選んだのか…… ちょっとドキドキだぜ。

「では…… 3…… 2…… 1…… キュー！」

「コホン……」

ん、なんか妙に聞か…… あ、照れてるのか黒猫。

「い、いくわよ……」

『月は出ているか？』…… つ

いや、今まだ曇だし。

「は？」

つて桐乃、その反応は冷たくないか？

「…… つ…… 『月は出ているかと聞いている』……」

「…… ？ …… (俺な)」

「……」

と、俺が突っ込むべきか迷っていたその時、パチパチパチ…… と、

沙織が拍手で一人を褒め称えた。

「お見事でござるよお二人ともー いや、拙者の田の前にジャミル様が降臨しました…… 今、この部屋はまさに、フリーダンのブリッジでした！」

……？ ああ……今のがそうだったのか……俺はまた、黒猫が壊れたのかと思ったよ。

「……恥ずかしかったわ……」

ははは、でもそんな照れなくてもいいのに……つか桐乃は相づちだけか、なんかズル……つてなんでオマエがそんな赤いの！

「ん……きりりん氏……熱でも？」

うん、そんくらい赤いな……流石に氣になつて桐乃の方をよく見たら、……つ！

「つてオイ！ それ酒じやね！？」

「ええ……まさか……ああ……本当に？」やむる

「まあ……ちょっと……」

うわ……やべー、あつぶねー……今家に親父かお袋が居たら、二人正座で半日説教……俺はその上に鉄拳二十発は固いぜ……。一人とも留守で助かつた……後で、この缶と中身の証拠隠滅しどかなきやな……。

「ホラ、お茶を飲みなさい」

「ん……ありがと……」

「これは……リキュール類の発泡力クテルのようですね……炭酸ですし、一見ジユースのようで、間違つたのかと……気づけなくて申し訳ない」

コンビニの店員も気付けよなあ。

「いや、買つてきたのは桐乃だし……大丈夫かおい」

「ん……大丈夫。そんなに飲んでなかつたし」

缶を持つてみれば、その中身はほとんど残つてゐるらしい。度数も……ビールと変わらないようだ。

「量的には少ないですから、水を飲んでゆつくりすれば大丈夫かと

……」

「……ちょっと待つてて、顔洗つてくる」

「おい、本当に大丈夫なのか？」

部屋を出た桐乃を追つて階段を下りる。思ったよりはふらついて

いよいよ、足取りはしつかりしている。

「大丈夫よ、お父さんもお母さんも強いし」

「親父は底無しからなあ……。でもオマエ、まだ中学生だから。

「平気よ、顔洗つたらすつきりしたから」

確かに、さつきと違つて顔色も普通だし、声も張りがある。飲んだ量も、冷静になつて考えてみればビール一口分くらいだ。……心配のしすぎだつたか。

「分かつたよ、しんどかつたら呑つんだぜ」

桐乃を置いて部屋に戻ると、沙織と黒猫が気まずそうに俺を見上げてきた。

「大丈夫、というかほとんど飲んでなかつたしな……初めて飲んだからだよ……今はもうピンピンしてた」

「それなら良いので、」沙織

「そう……良かつたわ」

こいつ、桐乃が目の前に居ないと優しいよな……。幸い、桐野はすぐに戻ってきて「ゲーム続けるわよ！」と宣言したので、この間のようすに空氣も壊れることなく、パーティーは続いた。その後、俺が沖田艦長の物真似をさせられたり（これは知っていた）、ドラゴンボールの名台詞を沙織に言わせたり、相変わらずのテコピンや肩たたき、くすぐりなどが続いて……俺がちょっとびり……期待……いや、恐れていたような展開にはならなかつた。

「ちなみに、私はあと2回変身を残しています」

沙織、上手すぎだよおまえ……マジフリーザ様だ。

「……なんだか残念そうね？」

「ぱつ……違えよ！……なんか、楽しいなつて、ひたつてた

「……そう、ならいいわ」

あー、くそ……。こいつらホント人の心読みやがるよな！ つた

く、いたいけな男子高校生の内心を読むなよ！ 後悔するぞ！

……主に俺が！ そんな内心の叫びを余所に、罰ゲームばかりが繰り広げられている。もはや王様ゲームじやないんじやないか、こ

れ？

「もんどううつて読みいつ」

「ばかめ」

「龍の印は正義の印！」

「鉄の悪魔を叩いて碎く、キャシャーンがやらねば誰がやる……」

「あーあつて感じ……ホント、あーあ

「メーテルううううううう！」

「（前略）星が輝く陰で（中略）お呼びとあらば（以下略）」「おう、八丁堀い」

「深町……我が艦は世界最強の原子力潜水艦なのだ……」

「見ろ！ 人がゴミのようだ」

「クリリンのことか――一つ一つ！」

「考えるな、感じろ」

「ジョークラッシュだ！」

「これは……ゴルゴムの仕業だ！」

「あなたの心です」

「俺が正義だ！」

「俺がガンダムだ！」

「ガンダムばつかだな沙織。

「いいか、鉄朗に力スリ傷一つつけるな！ 無事に地球へ帰すんだ！」

「オマエのモノは俺のモノ、俺のモノは俺のモノ」

「桐乃、すげー似合つよ。

「ベフォールの子供たちだ……」

「レイイイン！ おまえが欲つすしいいいいいいいつ一つ一つ！」

「そんな……私で良ければ……ふつか者ですが……」

「言わせたのおまえだよね沙織！ 知らないと言つてる俺に即興で台本まで書いて渡して！ 引いてるじやん二人ともー、噛んじやつたし！」

「LIKE OR LOVE？」

「そなたの父で……幸せであつたよ」

「唯……オマエは、価値ある選択をした……」

「ぼく、銃、ならない……ぼく、スーパーマン、なる」

「逃げないヤツはよく訓練されたベトコンだ！」

時々、俺が映画の台詞とか注文しても全然いけるとか……。罰ゲームになぜそんなノリノリなんだおまえらっ！」

「アーブドル・ダムラル・オムニス・ノムニス・ベル・エス・ホリマ

ク 我とともに来たり、我とともに滅ぶべし……」

「俺達は今……太陽と共に戦つてゐる」

「待て、これは孔明の罠だ」

「ひゅ～～……ロンドルキアの洞窟の落とし穴の音」

すまん……やつたけど忘れたわ。

「私はイサコ……名付け親はあんただ」

「俺の名だ……地獄に落ちても忘れるな」

「わたしはどんな強い相手もおそれない。同時に、弱い相手もみくびらない主義です」

「だーれが殺したクックロビンフ」

なんか時々歌とか入つててカオス……といつが、半分もわからね

よ。オタクこえー。

「ハロー、ハロー。市民、幸福は義務です」

「デコーズ・ワイズメルだよ～ん」

「ラフィールと呼ぶがいい！」

「墮ちていくわたししいいいいい～～～！」

「宇宙戦艦ヤマトの主題歌を……」

あ、それならいける。

「……非公式4番までフルコーラスで」

知るか！ 桐乃も黒猫も分からんようなネタを俺が分かるか！

おまえだけちょっとおかしいよ～

「かーみーかーぜーの一術一つ！」

「しあわせだつた時もある…… そうでなかつた時も……」

「さよなら……みすた～うひしめ……」

「ボールは友達！」

あ、これは知ってる。でも友達蹴るなよな？

「夢は……叶えるためにあるのだから……」

「人間が生きものの生死にを自由にしようなんて、おじがましいとは思わんかね……」

「Z・E・D」

「早く戦争になーあれ」

「14へ行け」

「……しあわせの一歩、手前にいるってことなんだ……」

「ビーティグオー！ ショーターライム！」

「一枚こぼれることもある」

「いくら人気の絶頂にあらうとも……いつかは落ちる運命にあつたのね」

「……もつヤダこいつら……全然わからねえよ……」

「今度の王様は拙者でいざるな……では、2番が3番の耳かきをするでいざるよ」

お、良い線ついてるなあ……いづこづこで空気を読む沙織は流石だぜ。しかも3番俺俺俺俺俺……つー ラッキーつつ！

「2番……アタシだけど……3番……誰？」

うそーん、おまえ耳かきできんの？ いや、正確には誰かにしたことあるのか？ もしそんなヤツいたらぶつ飛ばすけどな！

「ん、ないけど多分大丈夫」

「ギブ、沙織、お題」

「ちよつー！ 早つー！」

「おまえー！ 僕はまだ死にたくねえ！」

「早い！ 早すぎるよスレッガーセンー！」

「ふざけるな。俺も医者の端くれだ……命が助かるに越したことはないぞ」

「おまえを……殺す」

「ぶつそうだな。

「世界の半分をおまえにやる！」

「これも知ってるけどいらん。というか……流石に疲れてたし、喉もかれたぜ……てか途中、クジ引かずにやり合つてたよな？ いいけどさ。こんだけやつても……タイミングが悪かつたり、勝ち負けで狙いを外したり……で、桐乃と黒猫は、お互にやらせたい役をぶつけられずにいるらしく、なかなか終わらうと言に出さない。……てーか俺、そろそろしんどいんですけど……昨日寝てねーし……」

「……つ、やるじゃない」

「……いい加減、諦めたら？ 人間風情がこのクイーン・オブ・ナイトメアに敵うと思つて？」

「なあ……もうそろそろよくね？」

「しょ、少々興が乗りましたな……そろそろ終わりにしませんこと？」

「お、ちょっと素が出た。

「……分かったわ……次で最後にする……その代わり……きつこのいくわよ？」

「どうぞ、地を這う虫さん、お好きに……」

「あ、はは……はは、お一人とも……クールに……ね？ 〇〇〇一〇〇〇一〇〇〇一〇〇〇一！……ド！」ざるよ」

ぐるぐる眼鏡が気になるな。というかタマには外せばいいのに……素顔はすげー美人なんだからさ。

「では……泣いても笑つてもこれが最後の勝負……よ！」ざるすね？ だからなんでおまえはそんななんだ沙織、今日はもう突つ込む気力残つてねーんだってば。桐乃が、凄い勢いでクジを沙織の手から奪い取り……バキッ！ あ……折れた。ものすごい形相なんだけど……」えー。

「一番がつ！ 王様にキスつ！」

えー……俺達今クジ引いたトコで、まだ見てもいないんだけど……

「…………ほ…………ほ…………」

なんか、尻すぼみに小声に……へタレたな。といつかオマエ、そのクジが王様かどうか確かめてないよね？ だって……俺の手元にあるの

…………王様だし…………。

…………ルールとかどこ行つたんだよ…………

「沙織…………」

「な、なんで「いざる」か？」

「いや、そのスマン……手、大丈夫か？」

「ああ、幸いクジが折れたおかげでか、なんともないです……引き抜かれていれば、ささくれが刺さつていたやも知れませんが」手のひらを広げて見せてくれる。確かにケガはないようだけど

…………うん、ホント、マジごめん…………。

「な、なんなのこの女…………わ、私は3番だから、無事よ」

いや、無事とかじゃなくてチヨンボだろこれ、誰か突つ込めよ。

…………俺は嫌だけど。

「せ、拙者は…………」

沙織の手元をのぞき込むと……折れていない割り箸に、マジックで書かれた「2番」の数字が見える。なんかちょっと残念かな……とか思つたり。

…………ん？…………てことは、残つた一本つて…………

「折れた方がきりりん氏のもので「いざる」から…………うん

『一番は、おつりさんでいるな』

「…………といふか俺、王様…………なんて言える雰囲気じやないなあ…………もう、どうでも良いけど…………わざと降参して、テキトーに恥ずかしい口調言つちやえよ…………ここまで来たらどんな恥ずかしい口詞も平氣だぜ…………俺なんかもう何でも言えるね！…………いやマジで…………なんだつたらギーコー特戦隊のポーズしちゃつてもいい！…………

「なあ…………黒猫…………」

ま、ちよつとは手加減してやつてくれよ…………と田で合図つよつとした俺の田に飛び込んできたのは…………今まで見た黒猫の表情の中で「最も残虐なモノだつた」と断言できる…………どのくらい怖いかといふと…………。

あやせたん完全体…………（天使の壁）…………（天の壁）…………今のは黒猫…………（家族の壁）…………親父…………（ロサイト見てたのがバレたときの桐乃の顔…………）…………（どうしようもない壁）…………（麻奈実のふんふん…………）…………

うん、だつて麻奈実の怒つた顔怖くねーし…………むしろ泣かれる方が怖い…………。

まあ、こんくら。これは…………ヤバイ、マジヤバイ、どんくらいヤバイつて…………あ、もう言つてた？…………とにかく真剣なんだつて…………そんなに負けたくないのかよ…………。

「な、俺が代わりにやつからおまえ…………」

「つむさいだまれしやべるな」

返事と同時に、頭部をがつちり押さえつけられて、横に捻られ…………つーか痛えつて！…………首を捻られた俺は…………ちよつど、黒猫と向き合つような形に…………なんか、笑つてますよ黒猫さん…………これはこれで怖え！…………つか…………桐乃の息が、俺の首筋にかかってるんだけ

「…………鼻息やばいよー、どんだけ負けず嫌いなんだ！　いいかげ…………」

流石に腹を立てた俺が向き直り

「おまえ、いいかげ…………！」

ガキッ！

んがぐべつー…

「…………ひー、んむつ…………」

「…………」「…………」「…………」

えーと…………俺は今…………何してますか？　おーけい事情を整理しよう

うまず痛覚だ生物としての基本的かつ原始的な感覚だこの進化したモノが触覚と言えるんじやないかな？うん歯が痛いなんかぶつけられたおそらく推測ではあるが同等の硬度を持つ物質だ可能性としては歯があげられるあと脣も痛い切つたかも知れないが殴られたような痛みもあるうん親父に殴られたほどじやない軽症　生存と行動に問題無し損傷軽微機関正常です口腔付近健在頭部はどうか？両側頭部に圧迫固定感桐乃の両手でがっちりホールドされている…………

ここまで、おそらく約一秒…………

びっくりして、思わず目を閉じてしまつたが…………恐る恐る目を開けると…………桐乃の顔、ディップの顔がそこにあつて…………

…………「ここまで、多分三秒…………」

つまり…………俺は、桐乃とキスをしていた…………現在進行形、INGで。

ここまで五秒

ちなみにきりりんさんは京介君の妹です、それから京介君は俺です。

その事が意識と繋がって認識に至り その瞬間

「何つてことすんのよつつつつつつつつ！」

思いつきり殴り飛ばされた！ しかもグーで！ 仁王立ちから足組み替えて腰入れて殴り下ろしたな！ 今のは洒落になんねーぞ！ というか……口をパクパクとさせ、呆然としている俺の前で…… 真っ赤になつた桐乃が、腰に手を当て……いきなり表情も変えて、 こう叫んだ。

「えへへえええと……ね？ ……蒼龍・アスカ・ラングレーのマネ つつつつつ！」

えー…… それ…… 茫然自失で、何も言えずに居る俺をキッ と睨むと…… 今度はそのままダッシュで階段を駆け下りていった……。

ええー…… な、何が…… ひょっとして、今の、一発芸で誤魔化し たつもり…… ですか……。

「……ちょ……だ…… 大丈夫でござる、か……？ その、今のは拙 者しかと見ておりましたが、事故でござるるよ」

「……はつ！」

お、おう、ようやく立ち直つたせいか…… 階下からは、水道の流れ れは流石に…… あう…… なんか、表情読めない…… 驚いてはいるよ うなんだけど……。

部屋を沈黙が覆つてしまつたせいか…… 階下からは、水道の流れ る音とガラガラとうがいをしているらしい音がする。…… 何気に失 礼だよね…… あいつ……。演技の一環…… ですよね？

『うげぼええれろろろろ、うえつ！』

な、なんか盛大に吐いてませんか…… せ、流石にドン引きだぜ…… もう失礼とかそういうレベルじゃないよ！

そして…… 部屋に残された俺達が何も言えずに固まつていると……

……桐乃が部屋に戻ってきた。

「あーっ！ やっぱり試しにやるもんじゃないわねっー。」

……まだ、続いてたんだ……。

「おお……きりりん氏……流石でござれぬ……」

「え？」

「いや拙者、感服つかまつりました……やはり欧米帰りのきりりん氏のネタ、ひと味違いますな！ キスなぞ挨拶の国です！」

「そ、そうかな？」

「身を切つての一発瓶……まこと見事、ijiは我ら、完敗でござれぬ」

「ま、まあね……」それでも、仕事で顔出しあわてるしね……」

「え……え……そ、それでいいの……？ アナタ……『いいの……？』」

「うん、黒猫、おまえの言いたい」とはよーく分かるぞ……だが、ijiは沙織ルートが正解だつ！ ……多分。

「は、はははー、びっくりせむるなよー」

我ながら、見事な棒だ。

「あんたがドジだから……つたぐ、やっぱローリンーク臭いしー。アナタも同じ臭いです。

「歯磨いて、モンダミン一瓶飲んじゃつたわよー。」

「えええ……き、きりりんさん……その……大丈夫……ですか？」

そこまで俺が嫌いか！ 流石にもうマジ泣きしたくなつたよ俺！

「うん、やっぱ吐いがつやた。モンダミンひとつとか、飲んだら駄目ね」

飲み物じゃないし、用量も危険です……よに子のみんなは……絶対にマネしちゃ駄目だぜ。

「そ……そつ、さつきのお酒のせいで戻しているのかと思つて……

心配したけど……だ、大丈夫みたいね……」

「ijiめんねー！ ひょっとしたら、ちよつと酔つてたのかなあ……？」

「かもね……色々」

酒のせいであつてくれ！

「ああ……しかし見事な芸だ！」ひつた。締めに相応しいものでした
……そろそろ夕刻ですし、我々もおいたましましようか、黒猫殿」
なんか、すまねえな、沙織……おまえには助けられてばかりだ
よ。

「やうね……私も、帰つてみたい番組もあるし、妹達の面倒も見な
いと」

「すまないな、たいしたもてなしも出来なくて……ああ、片付けは
良いよ、俺がやるからそのままにしておいてくれ」

「それじゃ、お願ひするわ……行きましょう、バジーナ」

「……その……またな

「ええ、それじゃ」

結局、そのまま打ち上げはお開きになつたわけだが、……一人を玄
関先で見送つた後……なんとも気まずい……前回よりはだいぶマシ
だけどな……一応、みんな楽しんでたみたいだし。

「なあ、おい桐乃」

「アンタ」

声をかけるのを見越していたかのよつて、桐乃が言葉を被せてき
た。

「なんだよ」

「鼻血、出てるよ。あと口も切れてる」

「おまえが殴つたんだろ？が」

「なんだか……もう怒る気もしてこねえよ。

「こつち来て」

なんだよ、また文句か？ 説教か？ 流石に温厚な京介様だつて
切れる時は切れるんだぜ……。舐められっぱなしじゃないぞ、いい
加減にさつきのは……シャレにならんだわ。俺はともかく、おま
えのために来てくれた二人に……なんだと思ってるんだよ……。沙
織がフォローしてくれなかつたら、どうしようもないことになつて

たかもしれないのに……。

「そこで待つてて」

俺は、また正座させられてたまるものかと、リビングで立つたまま桐野を待つた。いや、俺はやせっぱり本気で怒つてるんだぞ……と主張していたのだが……うまいかないもので、桐野はすぐに戻ってきた……救急箱を手に持つて。

「なんで立つてるの？」

「え……いや別に」

まさか「舐められないよ」とも言えず、口もつてしまつ。座つてくれないと、手当でできないからソファに座つて

「お……おつ

「……」

「……」

桐乃がアルコールを染みこませた脱脂綿で傷口を拭つ間……俺は、黙つて桐乃の言づがままにそれでいた。桐乃も……一言も喋ろうとしない。

やがて、口元の切り傷に小さく切つた絆創膏を貼り、丸めた脱脂綿を俺の鼻の穴に突つ込んで、それで手当は終わつたらしかつた。あまりにできぱきと手を動かすので、少し驚いた。

「うまいもんだな

「何が

「ん、手当……化粧の応用か？」

「違つわよ、陸上やつてるとね、どうしても切り傷や擦り傷は出来

ちやうから

「ああ、そりやそりや……俺も昔、走り回つては怪我をしてたもんだ……いつ頃からだっけな？ 怪我するのが怖くて、走らなくなつたのつて。

「モデルの仕事もあるからね、気は付けてるんだけど……やっぱり

痕にならないようにちやんとしこないと

「ふうん……流石だよ。

……ありがとう

あれ？思わずお礼言つちやつたけど、よく考えたら殴つたの桐乃だつた……まあいいやもつ。

「何よ……キモ……」

素直に言われとけよ……！」

「へいへい、やつぱ可憐げがないなオマエつて

「つさいわね……あと、ゴメン」

ええと……今、俺謝られたよな？珍しいこともあるもんだ……いつ以来だつけ。……いや、今回は謝られて当然か……その当然すら無かつた時期に比べると、俺達も歩み寄せたのかねえ。

「もういいよ、それより、明日でいいから一人にも謝つとけよ？」

酒のせいにしても良いから

「うん……『もういい』んだね？」

「？ああ、もう俺のことはいいよ……それより、オマエも唇の所切つてるぞ」

桐乃の唇の端が少し　ほんの少しだけ切れて、薄く血が滲んでいる。

「あ、うん……モンダミンが漫みてちょっと痛い……」

……モンダミン飲むほど厭がられたのはちょっとシヨックだつたけど……確かにイヤかもなあ……。前にさよつと肩に触つただけでもあんなに君持ち悪がつてたし。なんか、逆に俺が悪いことしたみたいな気になつてきたぜ……。

「絆創膏、貼つてやるうつか？」

「いい、自分でやる」

軽い言葉なのに、気まずさを誤魔化そうとしたのを見透かされたよつた気持ちになる。なんでだろうな……このモヤモヤは？

「私、もう寝るね……明日から合宿で五時出発だから。お父さんとお母さんには晩ご飯いらなって言つておいて」

ああ、毎年この時期だったな……そうこや。『ミケやうその他の色々で……すっかり忘れちまつてたよ。

「わかつた、無理すんなよ。その……明日の朝なら俺は寝てるけど、

合宿頑張れよ」

「……つ、変なの……おやすみ」

「おう、おやすみ」

久しぶりに、柔らかい挨拶を聞いた気がするぜ……こいつとの……まあ「人生相談」以前の冷戦の時でも、挨拶はあつたけど……ものすごく義務的なものだったからなあ……ま、お互い様か。挨拶しねーと、親父にどやされるつて理由でしてたようなもんだし。

バタン　　と、2階の桐乃の部屋のドアが閉まる音が聞こえてきた。さて、俺も片付けしたら一休みするかねえ……今日は親父もお袋も遅いみたいだし。寝ても文句は言わないだろうよ

8月19日夏　　俺のファーストキスは、妹で、鉄の味と二ソニク風味だった。

第1章 2（後書き）

地味子編と言いつつまだ地味子さんが出せていない……これはあつと「ゴルゴ」の仕業だ！

第一章 3（前書き）

打ち上げも無事……とは言えないけれど、まあなんとか収まって、やれやれと思っていたら……赤城のやつが……瀬菜と駆け落ちだとつー。

やつぱりいつもなく馬鹿な展開にしたくて書いた。
やつぱり後悔している……でも反省は少しすることにした。

『高坂……頼みがあるんだ』

桐乃が合宿に出かけた日の夕方、まあつまり打ち上げの翌日。珍しく赤城のヤツが電話をかけてきた……てか、最近この兄妹から話があるときつて、たいていろくなこと無いんだよな。

「断る」

もちろん俺は断つた。こうこう時、相手に余裕を与えないのが勝利の鍵だぜ……俺はそう学んだのさ……妹に対する数々の敗北でな！

『ちょ、おま！ 話くらう聞けつて！』

「ヤダ、どーせろくな事じやないだろ」

『んなことねーって……バイトつーかさ、金儲けしない？』
んだよその胡散臭いマルチ臭しかしない話……こちとら貧乏で金に困っちゃいるけどな……犯罪に手を貸す気は無いぜ？……親父怖いしね！

「お断りだ」

『まあ、話だけでも……つてか、おまえしか頼れるヤツが居ないんだよ！ 本当に頼む！』

ありや、なんか深刻つーか……えらくマジだな。いつもの声とトーン違うし。……しゃあねえなあ……

『言つだけいつてみるよ、聞くだけ聞いてやる』

『おまえ確か4日ほど、家に誰も居ないって言つてたよな？』

『ああ……親父とお袋は旅行だし、うぜー妹は一週間ばかり毎年恒

「ううと置いてくんんだぜうちの親？」

まあ、仕方ないけどさー。つかこの年になると、両親と旅行つてのもなんか照れくさいし。何が「麻奈実ちゃんでも家に呼んでご飯作つてもらえばー?」だよ! しねーよ。それに、家で好き勝手で起きる機会なんて少ないだけに……ほら、色々とね?

「……は？」

すまん変態ブラノン野郎、もう一度言つてくれ……よく聞こえな

『頃花』(1911)は、『花の歌』(1909)の後編である。

「じゃあな……俺これから眼鏡モノDVD見るから切るな、電源も

「切るから」

うぢ　ひあ　ひかき二、ひみえ　はあ

「言つだけ言つてみる、何かあつたんだ一体？」

いや……そのな？ どうしても……一緒にいたくて、2人で暮ら

すことにしたんだ……

卷之三

線を越えちまいがついたのか
引く
三郎が

なかつた俺は寝められても鬼いみな?

『言ふ事無一語も』

デスヨネー。

『もう部屋も用意した……書類はまだだが、』

七

『本気なんだ』

そ、そ、うか……おおえ……すうじよ……友達やめたいくらいな！

『それで、三日間だけ匿つて欲しいんだ、家族にバレたら俺の人生が終わつてしまつ』

そら終わるわな、ウ

それは困るやつ……

『いや、その……まだなんだが』

なんじやそら、お互い納得じやないのか……？

「営利誘拐なら協力せんぞ？」

『犯罪抜きだつつーの！』

「おまえの気持ちは分かつてからだ。せつて、頃あつての気持つを窺ひはあ……しかしそれはいくらなんでも無理だよ。」赤城

めでから な?

『何を言つてゐんだ高坂?』

いや、おかしこのまえだから。

「強引すぎるだろ…… そういうのって、お互いの気持ちが大事だぜ。」

まあ、今日はせん寝センイだ。

『そへじや汰タマなんぞ!』

「うわ！
耳元で怒鳴るな！」

ただでさえ声でカインだよホマニー

『あ……ああ、すまん。だが……急がないと……売られちゃうんだ』

え、ちよ、あんたん家なんか変じやね？　この現代に身売り

「う 売られるつて!? 二ヶ類

『いや、正確には買われかねない』

「一緒にやる。それ圈うとか預かるとか駆け落ちとかひこうしてベ

ルじゃなくて犯罪だろ普通に！』

落ち着け赤城、そりや俺より親父の仕事だ、つーか警察行けよ！

『……何を言つているのか分からんが、あれ売り物だぞ』

……ん？ ビーも話が噛み合わないな……なんか……

「いや、売り物つておまえ、仮にも血を分けた妹をだな」

『高坂……おまえ、何か勘違いしてないか？』

んー？ ……えー、まさかなー？

「なあ……念のため聞きたいんだが……その瀬菜つて……もしかして……」

頼む……俺の思い違いであつてくれ……！ もしそうなら、おまえはある意味、俺の当所の想像よりももつとヤバイ世界に入りかけてるぞ！

『うん、らぶドール瀬菜ちゃん……2号？』

おお……ジーザス……越えちゃつたよ……いとも軽く……あちらとここちらの境界を…… なんで俺、この電話取つちまつたんだろうなー？

「しょ……正氣か赤城いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

『だ……だつて！ 店員さんが『毎週来るよね……そんなに気に入つた？ この子、展示品だし……入れ替えのタイミングで良ければ半額の三十五万で良い』って言つからつい』

通つてたのかよ！ そしてホントに買つたのかよ！

「『つい』じゃねえよ！ アホかおまえ！ いやアホだ！ どうしようもねえ！ さつさと返品しろ！』

『だ……だつて展示品だから半額だつて……ポイントとか貯まつてたし』

「それはもうわかつを聞いた！ つかポイントつて五百円分じゃねーのかよ』

『いや、一枚分あるから千円』

どうでもいい！ 心の底からどうでもいい！ つかどんだけ買つ

てたんだ！ ああ……何やつてるんだよオマハ……。俺……もういや神様、今すぐ十分前に戻してくれ！ ここからの電話完全無視して着信拒否にすつから！ 今すぐ！ そして永久に… わりば赤城！

『消費税もいいつて言ひし……』

ますますどうでもいいな…

……こよし、落ち着け俺。こじは……冷静に説得しよう。

「事情は分かつた、だがそれは出来ん」

『な……なんでだ！ 親友がこんなに困つてるとこ……』
繰り返すが、果てしなくどうでも良いと思つた俺は許されても良いと思つ。ネバーコンディングジャンピングマジビリでもいい。

「割どびりでもいい」

『わらりとヒデえ！』

「いや……だつてさあ……エロ本預かってくれとかそりこいつレベル
じゃねえじゃんかよ……流石に真面目に無理だ」

すまん、いくらなんでもちょっと無理だわ。といつか……こんな頼みを「任せろよ」って笑顔で笑つて聞けるヤツが、日本にどれだけ居るつてんだよ。

『くつ……仕方ない……』

「すまんな、他を当たつてくれ」

無理だらうけど。

『これだけは使いたくなかったんだが……』

「んだよ、いくら頼まれても無理なもんは無理だつて」

『……昨日、校舎裏で告白されたのみんなにバラすからなつ…』

「んなつ……！」

い……イヤな汗が噴き出してきたぜ……

……ど……どいか……だ、誰に……つて決まつてるけど…

『ふ……ふふ……出来れば使いたくなかったよ……こんな卑怯な手段…』

「くつ……せ……瀬菜か……」

『ああ……相手が誰とは聞いてないが……』

あ、あいつ……黙つてゐるつて言つたくせに……というか赤城、おまえの株もうストップ安だかんな！ 友達脅迫とからぶドールとか！ 兄妹セットでも抱き売り不可だ！ この不良債権コンビ！

「く……だ、だが、それでも……無理なもんは……」

『3万出そう』

ん何つ！ サ……3万……だと？ よく聞けよ、3万だぞ3万……妹様と違つて、親のお小遣いだけが収入源の俺には……超大金だ！ あれこれ買い物をしたがる方じやないが……そ、それは……でかい……。

ちょうど桐乃の合宿は一週間……お袋達は4日間留守だから、1日余裕があるし……実質1日で1万……だと？ 風俗よりすげえよ！……え？ もつといくか？……いやいや落ち着け俺……。

「だがな、赤城」

『5万』

「困つてゐる友達を見捨てちゃ、男がすたるよな」「だろ？」

『変わり身早つ！』

「切るぞ」

『わー！ 待て！ 切るな、冗談だ！ 今オマエに見捨てられたら本氣で困る！』

……つたく……』の兄妹が絡むとろくな事がねえよなあ……。

「で……どうすんだ？ 手はずは整えてあんのかよ」

『あ……ああ、そのへんはだな……』

……やれやれだぜ……。

という訳で……今、俺の部屋のベッドに……らぶドール（以降仮称瀬菜2号）が横たわることになつたわけだが……なんつーかコレ……気まずいなんてもんじゃねーな……あまりに見ていられなくて、布団かけたけど……超リアルなマネキンか死体が横たわつてゐるよ

うにしか……見えん……。一瞬、色っぽいな……とか思つちつやた自分を殴りてーよ。

「で、どーすんだよ……つか、思わず開封しちゃつたけど……箱に入れたままの方が良かつたんじゃ……」「

家電扱いで届くとは思わなかつたぜ……しかもこれ、配達が個別委託つぽかつたな……なんか、配達のおさんの意味ありげな表情が、もうね……考えないことにしよー……。

「ああ、いや、その……箱のまじや可哀相かな……と」「俺が可哀相だよ……」

泣きてえ。いや……俺は今……泣いてー……

「す、すまん。運び出すときは……ちゃんとまた入つてもらつから擬人化すんな……いや、気持ちは分かるけど……ギョつとするほどリアルだもんなあ……」じいつ。

「できればしまつたままにして置いて欲しかつたが……」「ベッドはちゃんと明け渡すから」

そうしてくれ、つうかどうしたもんかね……金に田が眩んで、思わず引き受けてしまつたが……思った以上にやっかいだなこれは……「で、なんでオマエまで泊まる準備してるんだ?」

あたりまえのよーにスポーツバッグからお泊まりセットを取り出す赤城に、ここまでシッコリを耐えた俺は評価されてもいい。

「え、だつて瀬菜ちゃん?」とおまえを一人つくりにできないし」「アホかおまえは! らぶドールに手を出すか!」

そら……ちょっとは……凄いなー? とか思つたけど……思つただけだし……

「い、いや……すまんその……だが……」

「はあ……もういこよ……俺も、これと夜を1人で過ごすつてのも嫌だし」

なんとなく後ろ暗くてカーテン締めて作業したんだけど……暗がりで見ると、ホント……死体みたいで怖いよ……なまじつかリアルなぶん……シャレにならん……。

「す、すまん」

「もういいって……けど、ベッドは俺が寝る……瀬菜は……床だ、おまえは布団で寝る」

「せ……瀬菜ちゃん2号が布団で俺が床じゃ駄目か?」「キモイからやだ」

「容赦ねえ!」

いや、だつておまえ……考へても見ろよ……同じ部屋で友達がらぶドール抱いて寝てるとか、らぶドールが布団に入つてるとか……俺の正常かつ纖細な神経には耐えられん……今だつてきつこんだぜ……。

「毛布くらいかけといでいいからわ、それで妥協してくれ」「う……わ、分かった」

分かつてもらえて何よりだ……出来れば、電話してくる前に理解して欲しかつたけどな! 色々と……そーいや……

「おまえん家つて外泊とかオッケーな方?」

「いや、フツーにいるそこなけど、なんかオマエん家遊びに行くつて言つたら瀬菜ちゃんが親説得してくれた。やっぱ何だかんだ言つて俺のこと愛してるよな瀬菜ちゃん」

瀬菜のヤツがその行動に走つた理由に思い当たる点は山ほどあるが、口にしたくねえ……取りあえず、ヤツの動向は押さえておかないと危険だな……冬口!!とかで俺の本が売られてたら泣くよ? ただでさえどつかのメイドさんに兄妹モノ描かれたといつのこと……。

「こざりと詠つときには俺の味方をしてくれて、愛を感じたね!」

良く聞け赤城、おまえの妹さんは不純な動機で君の手助けをしています。きっと今頃部屋で「ウヘヘヘ」とか言いながらキーボード叩いてるよ!! 「ミケならまだしも……秋の文化祭あたりで会誌とかに書かれて売られたら、本気で終わるわ……色々。

「なんか……腹減ったな」

そーいや、俺もおまえの電話もらつてから飯食つてねーや。気が

ついたらもう8時じゃん……。

「ああ、なんか親いねーつつたら麻奈実が晩飯届けてくれてたけど、おまえも食うか?」

一緒に食つてけつたら、なんか用事があるとかで帰っちゃつたんだよなあいつ。

「え? いいの……てかやっぱ付き合い始めたんだな、おまえら「……ん? なんか誤解してるような……」。

「付き合つてないつて、何度言わす気だよ」

「え、じゃあ誰に告られたんだよ? クラスでオマエに告める奴いるはずないし……」

いや、1人くらい居てもよくね? そら地味だつて自覚はあるけど……。

「やっぱオマエ飯抜きな」

「いや! さて、そういうんじゃなくてだな……まあ……食いながら話すか」

話すことなんかねーよ。一階に下りて、麻奈実が持つてきてくれたタッパーを次々とレンジに放り込む。ん……揚げ物がべちょべちょにならないようキッチンペーパー入れてくれてるト「」とか、アイツらしいな。

「いい匂いだな……田村さん、瀬菜ちゃんの次くらいに良いお嫁さんになるぞ?」

ばつか、あいつより良い嫁になる女なんてそういう居るわけないだろ? 俺が知る限り最高の嫁になる女だぞ? ……このシスコンめ……、相変わらず皿が腐つてやがるな。

「るせーよ、黙つて待つて」

「……なあ……高坂?」

「んだよ」

タッパーの素揚げ野菜を皿に移しつつ適当に返事する。次はハンバーグとニンジンか……。

「本当に田村さんじやないのか……その、告白の相手って

めんべくせー、超ーめんべくせー……。

「ああ、瀬菜から何も聞いてねーのか?」

「おー、相手までは……校舎裏で抱き合って愛を語ってたとしか聞いてない」

なんか随分誇張してんな! 嘘じゃないけどー まあ……それ以上余計なことは喋ってないみたいで何よりだ。

「ちげーよ、ついでに言つとまだ返事もしてねえ」

「ふうん…… そうか……」

お、この匂いは……チーズ入りだな……俺好きなんだよなこれ、付け合わせのニンジンは……嫌いだけど、あいつの味付けしたグラッセだけは俺も食えるし。甘さ控えめで箸休めにも良いんだよな。

「ほら、食えよ」

炊飯器から「」飯をよそつて渡してやる……（飯だけははうちで炊いといた）。何か不満そうだな、赤城。

「なあ……高坂……」

「文句があるなら食うな」

「いや、なぜ俺にはハンバーグがないんだ? 2個あるんだから、1個くらいくれても良くね?」

るせーよ、俺の好物なんだからいーだ。食わせてやつてるだけでも有り難く思え。

「仕方ねえな……ほれ」

戸棚から買い置きの缶詰と缶切りを渡してやる……それでいーだる。

「ほんつと分かりやすいな、おまえ」

何呆れてんだ……。んだよ、何が言いたいかさつぱり分からん。

「瀬菜にチクられたくなかったら文句言つなよ」

「へいへい……つと、これ缶切りいらぬぞ」

「あつそ、なんかそれも美味そつだな?」

「おー! てめーは田村さんの作つてくれたハンバーグがあるだろうが!」

「なんだよ……ケチだな」

「オマエに言われたくなえよ！？」

「もういいからとつとつと食つてとつとと寝よつぜ……」

「もういいからとつとつと食つてとつとと寝よつぜ……」

「つたく……お、この味噌汁すげー美味しいな！？ なんだこれ？」
「ん？ ああ、これは美味しいぞ。具は豆腐とタマネギとワカメ……」
出汁は煮干しと昆布だけでなんの変哲もないけどな……ちやんと一
匹一匹ワタと頭取つて、軽く炒つてから半田水に漬けて、それから
ゆっくり煮出すんだ……最後に甘口の味噌で仕上げてる……田村家
の味つてヤツだな。俺も手伝つたことがあるけど、めんじくせーんだ
ぜ？」

しかし……最近、ますます料理が上手くなつたなあ……麻奈実、
おばあちゃんの作る味噌汁に追いついたわ……。ちつ……味噌汁も
分けてやるんじゃなかつた……。

「ふいー……美味かつたーーー！」

「おひ」

「洗い物ぐらい手伝うかな……流しは？」

「いーよ、そのままで……明日まとめてやつから」

親父が居たら絶対許されないけどな、たまにはグータラクさせらつ
て。

「そーか」

「ああ……しかしもう今日は疲れたよ……とつとと寝よつぜ……」

「まだ9時前なのにか？」

うるせー、こちとら昨日の寝不足がまだたつてるんだ……色々
あつたんだよ。

「じゃ……じゃあさ？ その……こないだ一緒に金出して買つたD
VDあつたろ？ あれ、見てて良い？」

「駄目だ」

いいわけあるかああ！ あれは俺んだ……てか人んちで何しよう
つてんだオマエ！ なんかこう、ストップ安を突き抜けてどうじよ

うもないクズになりつつあるぞ！…………つたく…………俺の周りってのはどうしてこう……残念なイケメンとか残念な美人しかいないのかね……。

「はは、そういうと思つたよ
何笑つてるんだよ、イラつときたぞ。

「俺のだからな」

「はいはい……おい、なんか携帯鳴つてんぞ」

テーブルの上で、マナーモードにしたままだつた携帯がブルブル震えている……麻奈実か？　どーせ「ご飯食べた？」とかつて褒めてもらいたいんだろうよ……やれやれ……。携帯を手に廊下へ出てフリップを開く……と、ん？　これはっ！

「よ……よう？　どうした？」

フツ……ちょっとイケメン声、がつつかずに5ホール目……完璧だな俺。

「…………な、なんかキモいですね……お兄さん」

挨拶も無しにそれつて酷くね！？　マイラブリーエンジェルあやせたん……。

「いや、いつも通り普通だが……何か用か？」

「…………いや、おかしかつたぞオマエ……さては例の女か？」
るせえ！　つーか台所に居ろ！　こいつち来んな残念イケメンシスコン！

赤城に軽く蹴りをくれて台所へ追い払う。

「どうかしましたか？　私、急いでるんですけど……」

かけてきたのオマエだよね！　残念美人エンジェル！

「い、いや……何でもない。どうかしたのか？　こないだのプロポーズ、受ける気になつてくれたの？　今ならまだ間に合うんだけど……具体的にはあと一週間以内くらいなり」

「安心して下さい、一週間どころか人生終わつて生まれ変わつてもありませんから。そんなことどうでもいいんですが、桐乃のこと

……」

相変わらず容赦ないよね……。まあここで、そうだよね……。

「アイツがどうかしたのか?」

「いえ、何やら風邪を引いたと聞いて……携帯も繋がらないし……

……それを誰から聞いたのか聞けなかつた俺、普通だよね? あやせさんマジパねえつす。

「ふーん、昨日はそんな様子無かつたけどなあ……」

モンドミンの一気飲みとかバカな事をやらかしていたことは、あいつのイメージのために黙つていてやるか……優しくなつたよな……俺。

「そうですか……合宿初日からなので、ちょっと心配で

「何かあつたら連絡あるだろ?」、風邪だろ? この前みたいにイ

ンフルエンザって訳じやないなら、心配するなよ

「そうですね」

「ああ、何かあつたら連絡するよ

やつぱ、「アイツも良い奴だよな……桐乃のことをこれだけ心配してゐるんだし……時々、ちょっと怖いけど……あ、やーだちゅうどいいや。

「分かりました……それじゃ

「あ、ちょっと待つてくれよ」

「何ですか

……何か、いきなり不機嫌なんですけど……何その「もういこでしょ、邪魔!」みたいな口調……やつぱと違いますけど……だけど俺はぐじけないね!

「い、いや……そのな? たとえば……なんだが俺の友達が、とある女の子から告白されて……だな」

「へえー

心地どうでもいいのね……心が折れそつだよマン……。ひみつ

とくらいい嫉妬とかしてくれても良くね?

「ま、まあ待て……その、そいつも憎からず相手を憎からず思つて……だけ、ひょっと想定外だったところか、わりと急に告ら

れて困惑ってる……」ひこんだが、どうしたらいいかな……って

「……」

あ、あの……黙らると怖いですあやせさん……。

「それで、その相手とはどんな関係なんですか」

「いや、まあ……割と仲良くなっていて、一緒に学校から帰つたり遊びに行つたり、買い物行つたりとかかな」

「何も悩むこと無いじゃ無いですか……良かつた、ちゃんと役に立つたみたい」

何が?

「ん? いや友達の話だけどな」

「…………それでいいです。で、好きなんでしょう? その人のこと? あまり難しく考えなくていいと思いますよ」

好きか嫌いかで言えばかなり好きだな。女性として……うん、最近すげー色々……からかわれてたと思つてた部分まで含めると、正直ドキドキするし。

「そか……そうだな」

「ええ、そうです。ちょっとホッとしました……無駄にならなくて何よりです……良かつたですね……お兄さん」

「俺じゃないって! ……俺だけどな。」

「じゃあ……麻奈実お姉さんとお姉さん」「

……ん……え……? ?

「おにこりあやせ……おまえ……何か勘違いしてないか?」

「え、ああ……『お友達の話』という設定でした……失礼しました。野暮な」とを言つのもアレですし、これで

「いやいやいやいやいやいや……違つって!

「ちよ、ちよっと待てあやせ! ……違つ! ……それは違つ!」

「な……何が違うんですか? つまくこつたんでしょうか? いいじやないですかも? ……」

「そこで何で麻奈実が出るんだよー 違えーつて！」

「……え……」

あれ……？ なんか……さらヒートーンが低いよ……温度も……ぜ
絶対零度つてヤツ？ 加奈子が怯えていたプレッシャーはこれ
かっ！

「何ですって……」

「い、いや、だからな？ 麻奈実とか関係なく……その、友達の話
……告白したのは全然別の女で、その……」

「好きにすればいいと思いますよ、好きな人に好きと言えば良いだ
けです。それじゃ」

ブツ

切られた！……なんかかかつお、おお怒つてた……そ、
それも……マジで？ なんでだよ……ワケわかんねー……。

……嫉妬……？ うん、ねーな。

「おう、高坂一、電話終わつたか？」

あ、すまん。オマエの事完全に忘れてたわ。
「何か失礼なこと考えてそうな顔だよな……」

「いや、いるの忘れてた」

「黙つてくれよそういう本音はー！」

「すまん」

「つたく……あ、洗い物しといたぜ。手が空いたし」

あー、すまん……助かる。

「ああ、助かる……けど、なんか疲れたから悪いけど俺もう寝るわ

……」

「おう、シャワーだけ貸してくれや……トイレの向いりつへ」

「あつちだ、先に寝てるから勝手に使え」

風呂場の方を指して、階段の1段目に足をかけたといひで肩を

つかまれ、真剣な顔で赤城がこう言つた。

「俺が風呂に入っている間、瀬菜に何もするなよ？」

「するか！」

もうやだこの兄妹……。俺は部屋に戻ると瀬菜2号に毛布を被せてベッドの脇に下ろし、客用の布団をその向こうに敷いた。

「うーん……なんとも言えない光景……惨状だな……。つか俺の部屋狭いな。

物が無い割に……。桐乃の部屋の方が広いし……昔、麻奈実とかが泊まりに来たときは、あっちの部屋を使ってたんだよな……確か。あの頃はばあちゃんもまだ居て……3人で寝たりしたっけ……。

そんな事を考へてゐるうちに、一昨日からの疲れが襲ってきて、あつという間に眠つちまつたよ……疲れてたんだろうな……俺。

それから、さほど時間は経たなかつたと思う。ほんの……ドアが開く音がして頬をぺちんと叩かれた。なんだよ……赤城……つせーな、せつかくウトウトしてたたつてのに。

「るせーよ、とつとと寝ろ」

「ちよ……兄貴……」

「ん? なんか……のしかかつて……」

「バツ! 電光石火だつたね! 今の俺の動き! どれくらいってそりやもう、暗殺者に襲われた戦国武将が助かつちゃうレベル! 瀬菜の言つてた事が現実になつちまつとこだつ……た……ぜ!」

慌てて電気をつけると……あれ……赤城……縮んだ?

いや、それはねーつつーか……目が慣れたら……なんか、桐乃がなんでいるのまあえ?

「なつ……何すんのよ!」

いやそれこつちのセリフ、てかおまえ合宿じゃなかつたのかよ!

「いや、つーかおまえ何やつてんの?」

兄の寝込みを襲つてビンタとかすんなよなー

「ん……どした……高坂……」

あ、そーいやコレもいた。

「え……ええええええ! ? だ……誰つ! なんで! ?」

いや桐乃驚きすぎ、そんなビックリせんでも……。

「あ、すまん。俺の友達 今日は遊びに来てただけ」

はあ

瀬菜歡喜な展開でなくて良かつたぜ……だが……警戒は

しておかないとな……明日はコイツ、物置に寝かせよう。

「あ、赤城つていいます、その、高坂君とは同じクラスで」

「あ、ああ、はい、そのいつも兄がお世話になつています」

「どしたのオマエ、変だよ？」

「…………し、失礼しました」

「いや、合宿は？ なんか風邪引いたんだって……大丈夫か？」

「…………？ ああ！ そ、そうなの！ それでちょっと大事を取つて

明後日からの参加にしたの！」

ふうん……まあ、ああいつのつて、雑魚寝だしな。風邪がうつる
とマズいだろうじ。

「う、ごめ……ん……ね」

知らない人間が居るからか口調が丁寧だな。そーいや、こいつ麻
奈実以外には割と普通なんだよな……よほどウマが合わないのかね
え。つか、何かたまつてんだきり…………き…………きやー…………あ、
あなたの足下—— 桐乃の目線…………ベッドのすぐ傍…………忘れてた

——

…………終わつた。

「あゅわ……ひつ……えつ……」

あ……なんか、叫ぶ余裕なさそ……

「きや——————つ！」

やつぱ叫んだつ！ やべえ！

俺はとっさに桐乃を抱きかかえ—— 以前、あやせと相対したと
きのように口を塞いだ。

「んむむむーー！」

うわあっ！ どんな絵面だよこれっ！ 夜の部屋で……男が二人……半裸の死体と……ショートパンツにTシャツの女子中学生を押さえつけて口を塞いでるって……お……終わってる……どう見たつてコレ、犯罪臭しかしねえ！

「いでき！」

マジ噛みされたっ！ 痛いって！ シャレにならん！ し……しかも……なんか……これ、マジ泣き……してる……。と、とにかくなんとかしなければ……。

「いいか、桐乃。よく聞け……これは怪しい事をしていたワケじゃない

ない

「んもむけーーっ！」

うん、そう言いたいのは分かる、俺だつてコレを見たら問答無用で通報する。……だが、とりあえずはなんとかこの場を収めねば……！ 俺は必死で妹を押さえつけたまま、十分近くかかつてようやく事情を半分ほど説明し……なんとか、桐乃を落ち着かせることに失敗した。

静かにはなつたんだが……（その頃には俺の手のひらはズタズタになつていた。かなり痛い）

「う……ひつく……う、うひ……あうひ、ひん……ずずっ！」

す……座り込んでしゃくり上げ始めたとは……これは予想外……いや……無理もないつうか……ね……自分の兄がラブドールと男部屋に連れ込んで……しかも、自分は口を塞がれ……さすがにこいつも泣きたくなるよな……。！……こんなにダメージを受けている桐乃を見るのは初めてかもしれん……。

「す……すまん高坂……その……」

あー……全部オマエのせいだが、もうこの際それはビリでもいいや……。

「き、桐乃……落ち着け……な？」

俯いて、ブルブルと震えている……！ これは……やつぱ……キ

してゐるよなあ……「うん……」エロサイト通りがバレた時以上だ……間違いない……。

「死んで償え」

「それは勘弁して！」

「ああ……本気だよこの田……絶対許さないつて目だ……。

「とりあえずお父さんに連絡……いや……それは勘弁してあげるけど……許せないから、今すぐ家から出て行つて」

「鼻水とか、涙とかで化粧が落ちてぐつちゃぐつちゃだよ……怖いけど……これ、俺達が悪いよな……明らかに……」

「とりあえず……事情を説明して、それからゆつくり殺すから」

それから30分、俺達は正座したまま女子中学生のお説教に、言い訳をする羽目になつてしまつた……なんてことだ……。

「……で？ 申し開きはそれで終わり？」

結局、赤城の方は桐乃の扱いがよく分かっていないのもあって……大半の事情を俺が説明したわけだが……まだ、桐乃は怒りが冷めないらしく……俺達は足を崩すことすら許されずに入った。

「そ……その、何度も言つたが……これには事情が」

「ダツチ イフ連れ込むような変態は喋るな、だが説明はしづ」

「うづ……もう駄目だ……」

「とりあえず、今すぐ捨ててきて、言い訳は認めない。あとアンタ、しばらく帰つてこないでどつか行つて、公園で寝ろ」

「べもねえ……。そろそろ諦めて、しばらく麻奈実んちにでも逃げるかな……と諦めかけていたとき、赤城が突然涙を流しながら桐乃にワビを入れ始めた。

「こつ……今回のことは……全部俺のせいなんだ……高坂は……悪くない」

うん俺もそう思つ。

「だ……だけど……瀬菜は……瀬菜ちゃんだけはなんとかしてくれ捨てるのだけは……許してくれ……」

「聞きたくありません、事情も何も……こんな」

「いやつ聞いてくれ、その……」

言葉につまり、嗚咽する赤城……。これが本当に妹のためなら格好良いのにな……ギャグにしてもタチ悪いわ。

「どうか『瀬菜ちゃん』ってなんですか？ 名前まで付けておかしいとしか」

ええ それオマエが言ひちゃう……？

「……」

「ああ……その……だな、こいつの妹の名前なんだ……」

ちょっとだけ赤城が可哀相になつて、間に入つてフォロー……に

なるのか怪しい弁護を試みる。

「え？ ……妹つて……ひょつとして……生き別れの妹さんや、病死したとか……？」

どんだけエロゲ脳なんだオマエ！ ちょっとおかしくよ！

「い、いや……その、瀬菜は生きてるけどな。黒猫の……同級生で、ゲーム研究会の仲間だ」

「瀬菜ちゃんつて……ひょつとして……コミケの時の……せなちー、だよね……言わせてみれば……確かに似てるけど、それが……なんの関係があるのよ」

「その……」

「いいよ高坂、俺が話す」

男前な顔とセリフだけど、土台からおかしいからな？ まあそれはともかく……それからほぼ1時間……赤城がいかに妹を愛しているか……など……について……熱く語つていたわけで……最後の方はもう、俺聞いてなかつたけどね……足、痺れて痛いし……。

「だから……どうしても……妹にそっくりな人形が誰かの慰み者になるなんて許せなくつて……」

「ふ……ふうん……そう……なんだ……」

「高坂に迷惑をかけるとは分かつていたが……部屋が空く明後日まで……と思つて」

「部屋まで借りたの！？」

「そんなびっくりすんなよ……俺も驚いたけど……らぶドール購入よりはびっくりしなかったよ、うん。

「よ……よく借りられましたね……保証人とかは？」

「え？」

「……？」

「あ……そーいや、俺ら一八歳だけ……こういうのって、多分保証人とかいるよね？」

「け……契約書……まだ、読んでない……仮押さえってことで……」

決めてきたけど……」

それから5分後。

「無理みたいですね」

「な……なんてこつた……！」

いや赤城、最初に気付いとけよ……舞い上がってたんだろうけども……。

「はあ……もういいです。とにかく……！」

「は、はい」

「捨てるとは言わないから、明日中にどうにかしてよね？ こんな変態兄貴が家にいるなんて知られたら、アタシあんたの事本気で殺すから」

怖え……。

「赤城さん……でした？」

「は、はい！」

「事情は分かりました。でも、やはり受け入れられないものは受け入れられません。分かつていただけると有り難いです」

「すみません……」

あれ、なんかコイツおかしくね？ 俺だつたら半殺しだよ。て一か流石に今回はされても仕方ないつうか……さつきなんか本気で震えてたし。

やつぱあれか？ イケメンだからか？ 「イツ、御鏡みたいのとは違うタイプだけど……くそ、腹が立つな……。

「アタシ、風邪気味だからもう寝る。私が起きて次に来たとき、まだここにそれがあつたら、今度は本当にお父さんに電話するから」というか、何おまえ携帯とかで写メ撮つてんの？

「え……現場写真？」

現場言つな！

「まあいいわ、何かあつたら、これバラ撒くから……分かつてるわね？」

「くつ……仕方ない……。

「おう……分かつた」

「た……助かります……」

「うーん……女子中学生にマジ泣き説教とか食ひつけまつたよ……

もう、俺らの尊嚴とか、「ミミだな……。

「じゃあ、そういうことで」

そう言い残して、桐乃はドアを閉めて出て行つた。勢いからして「びつせり少し落ち着いてくれたらしいが……なんとも後味の悪いことになつてしまつた……びつしたらいいんだよ……。

「すまん……」

何度も目が分からぬ赤城の謝罪……もう聞く方も疲れた。

「いいよもう……とりあえず、寝ようぜ……明日、朝一で考えよう

……」
気がつけば、既に日付が変わっていた。もう、何もかもどうでもいいや……。

「なあ……高坂」

「んだよ……寝ろつて言つたら」

時計を見れば、1時を少し回っていた。疲れてはいたが……目がさえて眠れない、きっとコイツもそうなんだろう。

「田村さんのことなんだ……」

んだよ……まさかとは思つてこたけどマイシン本領でひりつかいかけるとか言つんじゃないだろ? な?

「まさかと思うが、好きだとか言つんじゃないだろ? な? だとしたら俺は、今日のことをアイシングで話さねばならんが」

俺も大ダメージだが、知つたことか。

「そつじやねえよ……そら、ちょっとはいいなつて思つた」ともあつたよ、カワイイし……胸も瀬菜ちゃんほどじゃないけどカイし「どに見てんだよ? つ飛ばすぞ!」

はつ……いかん、つい熱くなつてしまつた、あいつは俺の家族みたいなモノなんだよ、桐乃と同じだ、だから……誰にもやれねえんだよ。

「けどな……オマエと一緒にいる田村さんを見てるとな……あの笑顔を見ると……なんていうか……」ひ、そんな事考えられなくなるんだよ

「……」

「クラスの連中も、多分一緒に思うぜ……田村さん、結構人気あつたんだけどな、もう誰もそんなこと言わなくなつたよ」

そんなにたくさんの隠れファンタステイックが棲息していたことが驚きだ。

「んでだよ」

まさか、俺と付き合つてゐるから邪魔しちゃ悪いとかか?

「おまえが思つてゐのとも、多分違うよ……そうだな……『そこには』居るのが、並んでるのが『正しい』つつかな……すまん、つまく言えんわ」

じやあ黙れ、そしてもつ寝ろ。

「まあ、おまえが決める」とだつたな、すまん。もつ言わなによ

「……最初つから黙つてろよ……」

「ははつ……悪かった」

けつ……俺は、自分が思つとおりにするやつ……ひやんと、な。

俺は誰にも縛られていないし、自分で選ぶ そう決めたんだ。
好きな子がいて……俺を好きな子がいる。 他に何がいるってい
うんだ？

布団の中で俺は アドレス帳からアイツのメアドを選び
……普段よりちょっとだけ長いメールを打つことにした。

第1章 3（後書き）

まだ今日も出てこなかつたけど！ やつと書けた！
次は全部地味子とロックだ！ ひやつほーいー！

うん、反省なんかしない。だって地味子愛してるから。

第2章 1(前書き)

イイヤツ ホオオオオオオウツ！ 地味子が書けるー。 やつと田舎
た！
ばんじやーい！

やつ悔いはない。

「お昼、またお素麺だけどいい?」

「おーー!」

昨日の騒動から一日明け、俺はいつもの様に田村家で麻奈実と勉強を終え、居間の畳でのんびりとくつろぎながら素麺を茹でる麻奈実のことをぼーっと眺めている……。しかし我ながらこの勉強会、よく続くもんだな……ここ数日の色々もあつてちょっと疲れ気味だが……この時期にサボって、せっかく勝ち取ったA判定も落としたくないといつものあるが。

「ごめんね~、お素麺ばっかり続いちゃって……」

「いーよ、疲れてるからあんまこつてりしたモン食いたくねーし」

「え……? ジャあ……昨日は、ハンバーグよりもちらし寿司の方が良かつたかな……迷つたんだけど」

「ん? いやいや、晩飯はガツツリ食いたいからひょりど良かつた。あれ美味かつたし」

「そ……そ? 良かつた~」

そんなにうるたえるなよ、昼間は暑いからどーしても食が細るだけだつて。それに、おまえの作るもんは何だつて美味しいぞ……何より、ちょっとだけだけど、俺の好みに合わせてるだろ? 田村家の味と微妙に違つてたりするもんな。

「赤城君がお泊まりしてたんだっけ?」

「おう、ひでー日に遭つた。おかげでまた桐乃と喧嘩しちまつた

……今朝は……流石に部屋から出てこなかつたし……。風邪のことはちと気になつたけど、昨日の様子じや、さほど心配なさそうだしな。

「そりなんだ……桐乃ちゃん、お年頃だし難しいよね~」

「あいつの場合、年頃以前の問題だと思つ」

喧嘩の原因が……らぶドールを匿つていて桐乃に見つかつたせい

だとは流石に言ござらんな。ちなみに……瀬菜2号は翌朝、開店前だというのに、電話を受けたお店がすぐ回収に来てくれた。家族に見つかって返品といつた事はままあるそうで細かいことは何も言わず、キヤンセル料すら取らずに回収してくれた。なんといつが……あの侠気溢れる店長が格好良く思えてしまったのはナイショである。

そして、ドナドナされてゆく瀬菜2号の乗ったトラックを見送る赤城は……「これ以上ないほどに格好悪かつた……号泣してゐし……もう、株価で言うと……ちり紙交換クラスの価格と言つても良いレベル。

つか、何も昨日無理して持つて帰ること無かつたよね？ なんて気付いても後の祭りだ。

「あはは、でもこないだはず」おへへ仲よみあひじてたよね

「……ああ……まあまあ」

結局、大雑把に桐乃とのデートの事情を説明したのだが、こいつがどこまで理解しているかはちょっと怪しいな……と言つても、言い訳を重ねても嘘くさくなるだけだし、悪いよつて解釈をするようやつじやないから心配はしていないが。

「あやせちゃんからも話は聞いたしね」

「ふうん……ホント仲良くなつたのな、おまえら」

俺なんかあいつに、ジーでもいと思われると思えないぞ
……ちよつと妬けるな。

「きようちゃんのおかげ……かな？」

「ん？ まあ紹介したのは俺だつけな」

「うへん……それだけじゃないけどね~」

んだよ、最近こいつ何かともつたいぶるよな……幼馴染みに秘密なんか作れると思うなよ？ ……ちよつとからかってやるか……。
「ところで、おまえ女に田覓めたの？」

ガシャン！

「……ええっ！ なななななにをこいつてるのきようちゃんつー？」

いやそんな、お玉を落とすほどビックリしなくても……。しか

し、ここつの驚き顔と困り顔は、ホント癒されるわ。

「ん、いやなー？ おまえの部屋の鏡台に見慣れない化粧品があつたからやー」

「ええっ！？ 出しちばなしだった？ わたし！？」

「なんか知らんけど高そうなビンだなーって思った」

隠してゐつもりだつたのか、相変わらずどつか抜けてるな。

「なんだあー……そゆこと……」

何だと思つたんだこいつは。

「ああいつのつて高いんだり？ おまえ、こないだまで化粧水くらいしか使つてなかつたじゃん」

「むー……冬はリップクリームだつて塗つてたもん」

それ……化粧品か？ なんかうちの妹様と随分差を感じるぜ……。

「いやどしたのかなー、つてね？」

「えと……ええとね？ あ、あやせちゃんが『試供品でもらつたんで良かつたら』つてくれたんだけど……」

ああ、なるほどね。そういうや桐乃もよく化粧品をオフクロに渡したりしてゐるな……仕事絡みで貰つたり買つたりで余るんだろ？……。あれは親父から底つて貰う代わりの貢ぎ物つてトロロかな。

「はは、でも使い方が分からなかつたとかそんなところだろ」

「あ……うん、そ、そうつ！ そつなんだ！……も、もつたいたくして使えなくて……」

だよなあ……おまえの顔、どう見てもすつぴんだもん。うちの妹なんか化粧したら……あれ？ 最近あいつのすつぴん見たっけ？……まあいいや、身内の顔なんかいちいち意識してねーし。

「おまえはそのまままでいいよ」

「え……そつかなー？」

分かりやすく上機嫌になる麻奈実。トントントン……とキュウリを刻む音がリズミカルに響く。……うん、よかつた……またうつかりあやせと比較して……俺が困るところだつた。

「おう、そのままの普通が一番だつて

「えへへ……あ、固めでいいんだよね？」

「ん」

今日さちょっとお腹に優しくフツーの茹で加減でも良いけど……
ま、どうでもいいや。

「ちょっと待つてね～、すぐ持つていくから」

「おひ」

ぐでーっと横になつたまま、テレビから流れるお昼の「コースなんかを眺めていたら、麻奈実が大きなお盆に載せたガラス鉢を運んできた。

「もーっ、また姿勢悪くしてテレビ見てる～。目が悪くなっちゃうよ～？」

いや、おまえの方が丑悪いじゃん。ていうか小言が一々おばあちゃんだよなあ。

「へいへい……つーせんせーと」

「はい……どうぞ」

「おひ、いいね……これを見ると夏つて感じるよ」

「大袈裟だな～、きょうちゃん。こないだもお素麺作つたじゃない」

「そうだけどな、ウチのオフクロの料理……何度も引き合ひに出してアレだけどさ、親父が昼間いなーいのを良いことに、素麺一週間とか続けて出すんだぜ……容赦なく。……あと、市販のめんつゆは良いとしても、フルーツの缶詰を「シロップ」と入れたこともあるし……食つたけど……」

「まあ、そりなんだけどね」

出されたのは、なんてことのない「普通のお素麺で、ガラスの大鉢に氷、キュウリ、薄焼きタマゴ、それにピンクがかつたハムがそれぞれ綺麗に千切りに盛りつけられている。何より、真ん中の彩りがプチトマトというのが素晴らしい……料理に果物を入れる文化はこの世から滅べばいい！……と思っている俺にはこれが一番嬉しい。

「ただいまー！ メシー！」

さて、いただきますか……と箸を手にしたところで、聞き慣れた
デカ声が玄関から聞こえてきた。

「ロック……うるせえ」

「おっ！ あんちやん来てたんだー」

「悪いかよ」

「んにゃ、後でさあー、俺の三味線聞いてくんね？ 新曲マスター
したんだぜ！」

「悪いが、午後は用事がある」

「冷たつ！ あんちやん高校上がつてから薄情になつたよなつ！？」
おめーの平家物語聞いてたら夜になつちまつしな……ロックと掛け合いでやつてると、ついつい小学生の頃みたいな気分になつて、

どうにも悪ノリが止まらなくなるのが俺の悪い癖だ。
「大人は忙しいんだよ……とつとと着替えて来いよ

「えー、めんどうさー。ねーちゃん俺もメシー」

「駄目だよー、着替えてこないと食べさせないからねー？」
「ちえつ……分かつたよ」

そんなに怒つた様子もなく、階段をドタドタと上がつていぐロック。あの急角度をよくもまあ転ばないもんだ。

「もー……ロックつてば」

「相変わらずガキだな……わて、いただきます」

「はいっ、どうぞ！」

「機嫌だなあ……こいつ。桐乃みたいに始終仏頂面のがいるウ
チよりも、こっちの方が落ち着く気持ち、分かるだろ？

素麺を一箸取つてつゆにつけてすると、濃厚な出汁の風味が心
地よく口に広がつた。

「お……今日は味が違つた？」

「分かる？ ハビの殻と頭にシイタケ、あと昆布で取つてみたんだ
よ。初めて試したんだけど……ど、どつかなつ？」

ちょっとだけ不安そうに上目遣いの麻奈実……なるほど、それで

「ハビ自分も食べずに待つてたのか。

「美味しいぞ、いつものカツオ出汁、……あれも美味しいけど、たまには違ひのもいいな」

「これは本当に美味しい、臭みの出がちなエビの出汁を、椎茸と昆布がうまくまとめてまるやかに感じさせる。それでいてしつこくない味付けというのは流石といふ他はない。」

「よかつた～、ちょっと不安だつたんだ～……あ、おしょうがいる？」

「お」

それを忘れてた……チユーブを受け取り、つにじと絞り出す……この気取らなさも俺好みだ。

「も～、またそんなに入れてる～」

許せ、たとえおまえの手料理でも、これだけは譲れん。

「しようがないなあ……きょうちゃんは、

「つるせー……ん？ 麻奈実、おまえの何それ？」

見ると、麻奈実の手元には大鉢とは別のガラス鉢が置かれていて何やら透明なものが泳いでいる。……ひょっとして？

「え……うん、その葛切り……昨日たくさん作りすぎちゃって……ああ……でもそれ、合ひの？」

「ふーん」

ずるずる、と素麺をすりながら麻奈実の方を見てこると……「うーん……何か……。

「きょうちゃんも午後、用事あるんだ……」

あるよ。

「わ、私もねー……あよ、今日はあやせちゃんと出かけるんだー！」

「へー……どこ行くの？」

「へへー……ひみつー。あ、駄田だよー？ そんな顔しても連れてつてあげないんだが、」

「何も言つてねー」

するする。

「ふふ……あやせちゃんから聞いたよー？ またせくはりしたんで

しょー！怒るよー？あやせちゃんが『しづらへかけてこなこく
ださい』って言つてたよー」「

わー……麻奈実フィルター越しだと全然怖くねえ……。つか何に
怒つてるんだあいつ？

「へいへい」

「言つ事聞かないとお母さんに話しかやうよー」

「それは勘弁してつー!?」

「こ……こいつ……変なワザ覚えやがつて……畜生……。

「ねーちゃん！俺のーー！」

るせえなコイツ、俺に立ち上がる無敵時間を寄せせや。

「自分で入れてよー」

文句を言いつつも、台所へ向かう麻奈実。んー……？　こいつ、

腰回りが……「ひ、ちょっと痩せたかな？

「あんちゃん、しばらく来なかつたじやん。元気だつた？」

「お盆周りは忙しくてな……おまえんとこだつて法事のお菓子や
で忙しかつたる」

「うん、じつちゃん達も今日は店の手伝い行つてる」

毎年、この時期になると法事やら何やらで注文が増えるひじく、

田村屋は繁盛するのだ。

「今年は手伝えなくて悪かつたな」

「いいよー、桐乃ちゃん達のお手伝いだつたんじょ？」

「お……おう、まあな」

まさか、夏ノミの原稿を作つてしまつた！　ともかくにへー……。

てかロック、めんつゆ飛ばすな。

「あ！　そーだあんちゃん！」

「んだよ、食うか喋るかどつちかにしろ」

突然、思いだしたようにロックが話しかけてきた。

「きりん……あんちゃんの妹！」

「……桐乃がどうしたんだよ」

いかん……なんか俺、最近あいつの名前を人の口……」とに野郎

から聞くだけで嫌な気分になるな……。これも全部あの御鏡のせいだ、うん、絶対間違いない。

「なんていきなり嫌そうな面なんだよー」

「もともとだ」

「駄目だよー、ロック。きよひけやんはね、”しゃべる”なんだから、無理言つたら……」

「何を言つとるかおまえつー！」

「どいつもこいつも……全く……。

「え、だつてあやせけやんからもさう聞いたよー。こないだだつて

」

断じて違つのー。もう泣くよ俺ー。最後のオアシスが崩壊したらー。

「え…… そうなの？」

貴様も真に受けて引くなロック！ やつぱおまえパロスペシャルとキヤメルクラッチフルコースなー！？

「違うわアホ！ …… つたく」

「えー、だつて俺ねーちゃんと“トーートとかしねーよ」

もう……言つても無駄だな、「トイシ」。

「どーでもいいわ…… で、何だよ」

「紹介してくれよー。駄目なら携帯のメアドだけでもいいからさー。」

「訴えを棄却する

「せめて審議してつー！」

中坊のクセによく知つてたな。

「駄目なもんは駄目だ。だいたいあいつがおまえなんか相手するわけ無いだろ」

「え…… そうかなあ……？」

「おう、そもそも…… そのマルコメで何しようつてんだ。あいつは同年代の男のこと、サルの群れくらいにしか思つてないぞ」

「まじねー、言つたでしょ？ 髪伸ばしてから頼みなさいって」

麻奈実、おまえもそれ違うから。

「まあ、悪いことは言わんからやめとけ？ だいたい、なんでもまた

急にそんなこと言い出すんだ」

おまえら会つたことないよな?

「え、ねーちゃんの持つてた雑誌に載つてたの見て、スゲー可愛いつたから」

「そんだけか!……まあ、見た目は……確かに可愛いわな。てか麻奈実も、なんで桐乃が載つた雑誌なんか持つてたんだ?」

「あ……うん、あやせちゃんからもらつて」

「ああ、そらそうだ。あいつら同じ雑誌の仕事とかしてるとみんな、同じカットに[写つた]写真もあつたわ。……俺も1冊自分で買つて持つてるつてことは……黙つておくか。」

「あ、そーだ、そのあやせちゃんでも良い」

「もつと駄目だ」

「じゃ、ねーちゃんがあやせちゃん紹介してよー。」

「うん……」「めん」

「何その泣きそうな顔! 実の姉に同情されたつ! ?」

「人間にはな、どんなに努力しても不可能な事があるんだ」

「追い撃ち! 無理じゃなくて不可能! なんでつ! ? ケチ過ぎるつ! 理不尽だ!」

「つむせえ、おまえにやどっちも荷が重すぎると」

「かわりにねーちゃん持つてつていいからまあ……」

「これは元々俺んだ」

「うええええええつ! ?」

「しまつた……失言だつたな。つか麻奈実、おまえもいい加減こいつらの[冗談]に慣れろよ……。」

「ほ……ほんとにつ! ?」

「いや、やつぱ違つわ」

「ええ~ ……ふー」

いやおまえ、真に受けんなよ……いつまで経つてもそんなだから、逆に周りが面白がるんだつての。つか「ふー」とか言つてほっぺた膨らますな、ただでさえ丸い顔がもつと丸くなるぞ?」

「は……あんちゃん……」

「んだよ、おまえもたいがいしつこいな」

何で両手を広げて「お手上げ」ジェスチャーなんかしてるんだ。いーからそのままそこの味線抱えて踊ってる。麻奈実、おまえもこのバカを止めろよな。……姉として……ん?……。

「なあ」

「?……な、何つ?」

「いや……その、薺切りとめんつゆつて何の?」

「え……え? おひ、美味しいよ? つちの薺切りだもん」

「ふーん」

嘘付けばーか、こいつ……またダイエットとかしてやがるのか。

「おいロック?」

「先々週から」

「あうんの呼吸でばらされたつ!? 私より通じあつてるつ! やつぱりか……まつたく。こないだ沙織に怒られたトコだし、野暮は言わないけどさ……おまえ、別に……今は太くないぞ?」

「ふーん、あ、麦茶くれよ」

「あ、ごめん忘れてた……すぐ持つてくるね~」

「けつ……興味があつただけだからな、物珍しさとか。怖い物見たつてやつ。」

「うーむ」

なんつーか……うひ……我慢するほどじやないが……パンチとか爽やかさのない韓国冷麺食つてるみたいだな……まあ、食えなくはないが。

「へえ~」

ロックのアホがこっちを見て「ヤーヤ」と笑つてゐる。……言つたことがあるならほつきつて言つたひびつだ? 言つても締めるけどな?

「おまえも食いたいのかよ」

「気持ち悪い笑い方すんなよ……殴るぞ……?」

「別に？ あんちゃんも大概ガキだなーって思つただけ」「おまえ、俺が帰る前にタワーブリッジな？ 瞬殺するし」俺はこれから、忙しいんだよ……大事な用事があるからな。しかし麻奈実もよくこんなの……。

「きょ、きょうちやん！ わたしのぶん取つた～！」

「るせえ、もう食つちまつたからてめーは素麺食つてひ

「もひ……」

「何笑つてるんだよ？ おまえも、そこのマルコメも……まったく。けど、なんつーかな、……あー……慣れたら結構食えるもんだよ……これはこれでさ。まあ、ここは俺の第一の我が家で……こいつらは……そう、家族みたいなもん……いや、家族と言つてもいいかもしないな。血は繋がつていなくたつて、わかり合える相手がいるつてのは良いもんだな。

俺は、このとき心からそう思い……ずっと続くようにな……と、そ
う願つた。

第2章 1（後書き）

やつと地味子さん本領發揮の2章開始！……………でも……勝利の方程式が見えないぜ……黒猫さん恐ろしい子つ！ 9話見て、麻奈実を吸収したのかとオモタアルヨ……

第2章 2(前書き)

あれ? なんか気付いたら黒猫どこかやつこいつるんですけど……お
かしい……地味子をさせりと逆転できる。そのはずなんだつ!

……。。

「よひ……待たせちまつたか?」

「ええ、15分とちよつと……もう少し早く着てくれると思つていたのだけれど?」

「すまなかつたな、ちつよと家まで戻つててさ」

そして、俺は今……黒猫に返事を伝えるために あの場所 校舎裏へやつてきている。あの夜のメールでは結局、内容を伝えきれず……長々と作ったメールを没にして、ぶつきらぼうな呼び出しになつてしまつたが……来てくれて本当に良かつたと胸をなで下ろす。ほんのわずかだけれど、こいつが来ていらないんじやないかと 怯える気持ちもあつただけに……余計に嬉しい。

「……貴方が心配していることなら大丈夫よ。部室もさつき確かめてきた、私の力の及ぶ範囲で、周りに人は居ないわ」

「そ、そつか……いや、それは考えなかつた……」

準備いいな……黒猫。まあ、こないだは散々だつたもんな。

「で、今日ここに呼び出したつて事は……『返事』を聞かせてくれるのでよね」

「ああ、そのつもりで来た、その……歩きながら話さないか?」「構わないけれど」

あの時と違つて、今日の黒猫はベンチの側でずっと立つていたらしい。この間の白いワンピースではなく、いつもの「クロリストアイル」だ。生地が薄いとはいえ……夏の田中に悪いことをしてしまつたな。

「あまり、その……真正面過ぎると落ち着かなくてさ」

「……はあ、貴方らしいと言えぱらしいけれど……」

「すまん、その……立ちっぱなしで疲れてないか?」

「大丈夫よ、今日の私は……プラ ナを少しばかり開放しているか

「さうか……じゃあ行こうか。喉も渴いたし、喫茶店にでも行こうぜ」

「いいわよ」

黒猫が俺の先をスタスターと歩いて行く。

「なあ、黒猫……どうして俺だったんだ？」

「……前にも言つたでしょ、同じ事を一度言わせないで」

立ち止まって振り返り、ちょっと怒ったように黒猫が言つた。

「ああ、だけどいまいち自信が無くてな」

「そうね、あんな妹がいたら……さぞ自信もなくなるでしょ……地味だし、凡百だし、センスも今一つ……何か飛び抜けたスペックがある訳じやなく……かといって、世俗も捨てられない半端な存在……本当に並の中の並ね……キングオブ普通の称号を授けてもいいわ」

はつきり言つね！　おまえホントに俺のこと好きなのか？　……

ますます自信がなくなるぜ！

「……それでも、私は貴方を選んだの。……いいえ、貴方でなければ、今の私は欲しくない」

「……はあ……格好いいな、おまえ」

「それで？　ヘタレ語りはそれでお終い？　悪いけれど……私は貴方を慰めたり勇気づけるために来た訳じやないのよ」

分かつてるさ。

「ああ……そうだな……黒猫。俺でいいなら……いや、俺もおまえのことiga好きだよ」

黒猫は、俺のその言葉を受け止めると……真剣な表示用で俺の顔を見つめ、言葉を紡ぎ出した。

「……そ、そ、そ、それは……イエスという意味で良いのね？」

ああ、それ以外の意味なんて無い。おまえが俺を好きで、俺はおまえが好きで、俺は今……誰とも付き合つちゃいないんだからな。

「…………ありがと……嬉しい」

あ、ああ……くそつ。せつかくの一大イベントグラフィックなの

に……照れ臭くて、その、まともに黒猫の顔が見られない！

「せひ、その……行け！」

「……うん」

一人で並んで歩き出す。ちょっとだけ、手を繋ぎたいな……とか、色々してえ！ とか、その……思ったけど……歯もいつもより磨いてきたけど……タイミングつてやつが……つまくつかめねえ。

「……」

そのまま、真っ赤になつて……多分一人とも。黙つたまま並んで道を歩く。アスファルトからの照り返しがきつくて、汗がだらだらと流れそうなのに……緊張のせいか、暑さをほとんど感じない。それどころか、意識が飛びそうになるのを押さえるだけで精一杯だ。

「……ふふつ……どうしたの？」

「ん、いや……その、ああ！ セツナヒテ……店までちょっと歩くけど、いいか？」

「ええ構わないわよ、勿論……その、『京介』」

「え……今、なんて……？」

「……やつぱり今のは、無しで」

「いや、うん……てかおい……ど、どうしたんだよ黒猫つ……」

声がおかしいな……と思つて見てみたら、黒猫が……涙を流して俯いている。こちとら脳天気に……嬉しくて「うわー！ 甘酸っぱいゼコンチクショウー！ ヒヤツホー！ これで俺も彼女持ち！ なんてはしゃぎやつになつて……慌てて名前呼びとかとかつかつ……しようと思つたのにっ！」

「なんでも、ない……ないわよつ……」

いや、だつて……おまえ、泣いてるし……何かしたのかよ俺！ と、とにかくどこか……路上で泣かせやつなんて、俺が最低野郎みたいじゃなかつ！

「……せひ、来いよ

「ん……」

泣き止まない黒猫の手をひいて、近くの公園へ立ち寄る。黒猫をベンチに座らせ、持っていたハンカチを湿らせて戻つてみると、黒猫はだいぶ落ち着いた様子で大人しく俺を待つていた。

「ほら……大丈夫か？」

「ええ……ありがとう……意外と気遣いが出来るしもべね、契約して正解だわ」

「なんだよそれ？ で……どつちが良い？」

苦笑しながら隣に座り、自販機で買つてきた炭酸とオレンジジュースを並べて見せる。

「お茶か水が良かつたのだけれど……まあいいわ。私の好みも、これから躊躇して覚えさせていかないとね」

「はいはい」

やつぱり桐乃の友達だな、憎まれ口は相変わらず……でも、こいつの黒猫も気楽で良いな。いや……白猫も黒猫も、どつちもこいつなんだよな……両方とも悪くない。

「オレンジジュースをちょうどいい」

「ん、見慣れないな……これ『ポンジュー』？」

「名前も見ずに買つてきたの？」

「ん、まあ100%ってのは確かめた」

さつきまで泣いていたのが嘘のような笑顔にホッとする。

「嫌いじゃないわ、それでいい」

「猫つて、ミカンとか嫌いだと思つてたよ」

「バカな事を言わぬいで」

「はは……はいよ、落ち着いたか？」

「ええ、見苦しいところを見せてしまったわね」

「急に泣き出すからや、どうしたのかと思つたよ」

「分からぬの？」

聞き返して、じつと見つめてくる黒猫の表情は笑顔のままだけれど……どう答えばいいのか、本当に分からなくて……。

「す、すまない……ってアレ?」

「……ふふふ……」

「あ、あれ? なんか……た、楽しそうだなあい……俺、からかわ
れた?」

「からかってなんかいないわ……貴方が……正直すぎて、嬉しかつ
たの」

「なんか、底が浅いとか、分かりやすいって言われる気がするな
「貴方の考えなんて、闇の能力を借りなくつたつてバレバレよ」

「へいへい」

「どーせ単純ですよ……。ふてくされたフリをして、缶のブルトッ
プを力シコつと押し込む。

「好きだと言つてもらえて……嬉しそぎて、泣いたのよ」

「ゲフッ! ガゴホッ!」

「むせたつ! 気管に炭酸が入つちまつたつ!」

「ちょ……ちょつと大丈夫! !?」

「えふつ……ス、スマン。びっくりした……」

「そ……そんに驚かないでよ! 」

「あ、また真つ赤になつた。……なんか……」いつの照れるパター
ンがちつよと見えてきた気がするな。

「驚くほど……俺がおまえを好きじゃないって思つてたのか?」

「……そうね……正直、こんな風に一緒に歩けるなんて思つていな
かつたわ」

「それなのに……おまえは俺を好きだと言つてくれたのか。

「今日も、泣きながら家に帰るつもりで出てきたのよ。貴方を引つ
ぱたくシミュレーーションを何度もしたわ」

「無駄になつて良かつたな」

「ふふ……そうね。……」

「ああ、結構涼しいだろ?」

「そうね、静かだし……悪くないわ」

「そか、良かつた」

オレンジジュースを飲みながら微笑む黒猫に安堵する。ああ……落ち着いたみたいで良かつた……。しかし、こう……冷静になつてみると……俺達、今は恋人同士なんだよな……！」は……その、やつぱ。

「私、あまり散歩とかしないから、近所でも知らないところが一杯あるのよ……貴方や、あの子に出会えて色々な世界を知つたわ……感謝してる」

「そりゃ、良かつたよ」

ベンチを覆う藤棚の作る陰と、池の水面を撫でた風が気持ちよく通つていいく……この間の夕暮れとはまた違つた心地よい空氣だ。

「よく来るの？」

「ん？　ああ、勉強の息抜きとか……その、学校の帰りに暇つぶしだりな」

……あれ、なんかひつかかるな。……なんだかつ……また、選択肢を間違えたような……。

「ふうん……」

「気の利いた場所じゃなくて『ゴメンな』

桐乃ならきっとボロクソにこき下ろすだらうな……缶ジュースに公園なんて、あいつからしたら最低の部類……つて何度か説教されたつけ。とは言え、今から改めて喫茶店つてのも変だしな……黒猫も、この場所が気に入つたようだし。

「いいえ、そういう意味じゃないけれど……まあいいわ

「え？　何

「……何でもないわよ

「そ、そりゃ

そう言つて軽くため息を漏らす黒猫。うつむ、女つてやつは……やつぱ分かりにくくな……俺にとつて分かりやすいのつて……麻奈実くらいだなあ……。黒猫も、さつきまではこう……ラブラブとは言わないけれど、なんか色々進んじやつたりとかつ！　大人の階段とか……いや、それは無しで、うん。

「そうね、私もちょっと焦りすぎていたわ」

「いや、確かにびっくりしたよ……」

「そうじやないんだけれど……まあいいわ、これから、ゆっくり躊
けていけばいいのよね……」

「躊けるとか……やめてくれよ」

「冗談だとは分かっているが、苦笑せざるを得ない。これから…

付き合っていくとして、周りからどんな関係に見えるかと思つと…
まあ、それはちょっと困る。

「あら……貴方、どう見てもMよ。まさか自覚がなかつたの？」

「全く無いことは言い切れな『い』が、認めたくはないな」

「てつきり、あの子のせいで田覓めたのだと思つていたわ」

「そりや勘違いだ、桐乃が無茶苦茶過ぎるだけだ。……あんな暴君
の前じや誰だつてそう見えるさ」

むしろ、桐乃と張り合えるおまえが凄いんだよ。

「相変わらずなのね……自覚がないのもたちが悪いわ」

眼を細めて笑う黒猫。つたく……どういう意味だよ、それ。て一
かまだ、田の周りがちつゝと赤いぞ。

「おまえらは一体、俺をどんな田で見てるんだ？」

「見たまんまよ、シスコンの変態、これ以上に貴方という存在を適
切に表現する言葉はないわ」

率直なご意見感謝します！ でもフォローして！

「あなたみたいなケダモノ……放し飼いには出来ないわ。だから、
私が契約してあげるの」

「光栄だよ、我が君」

ひねた物言いだけど、いいつらの言葉が分かるよつになつたんだ
から、俺もどつこいどつこいだな。

「貴方はまだまだだけれど……私の側に仕える』ことをゆるすわ……

「へいへい……なあ、その」

「何よ、言いたいことがあるならはつせり言こなさこ」

「うん、さつきの話だけどわ……その、俺のこと……ビ……ビつづ

「ぶかなー……なん、て？」

「あ、また赤くなつた……あー、つわー、顔真っ赤だ！やべえ、抱きしめてえ！」

「はつ……破廉恥なつ……せ、『先輩』で良いでしょ？……何か問題があるのつ？」

「おお、動搖しとるな。だが……俺も負けんくらい動搖してゐるぞつ！……自慢じやないけどな！」

「いや、その……せつかく……と思つてさあ、わざわざここかけて……」

「あ……まさか……今更『お兄さん』の方が良ことつの……？

「予想以上に重症ね……」

「それはないから！」

「と、とにかく……忘れなせ！……これは命令よ。もしかつさの事を思い出したら……ハつ裂きにして地獄の底に封印して、一度と出られないようにするわよ？」

「おつかねえ！……けど……ま、命令じや仕方ないよな。

「仰せのままに」

「でも……そうね。もし、恋人に……私のことを『本当に』好きになつてくれるなら……その時、もう一度……返事の代わりに……『瑠璃』つて呼んで

「え……？……どういつ……意味だ？……返事なら……今田、さつしだらう？……そんな戸惑いが、顔に滲んでしまつ。

「分からなければそれで良い、気付いていないならそれも良い。だけど……私は『貴方たちには』嘘をついて欲しく……つかれたくないの」

「俺は嘘なんか言つてねえ、おまえが好きだつてのも本当だ」

「そうね……嘘ではないわ……本当なのも知つていてる。……でも、それは本当に本当？……曇りなき真実？」

「何を言つてるのか、分からねえよ。

「言つている意味が……すまん」

「私の獨白に茶々を入れないで。…… そうね…… 私は、貴方を失いたくない、いいえ…… 貴方たちを失いたくないの。だから…… もう少しだけ、時間をちょうどだい。」これは…… 必要なことなの」
何て言うか生殺しだな…… けど、真剣なのは分かる。といふが、こいつは今日、何一つ嘘をつこちやいない。…… それだけは信じられる。

「わかったよ」

「あまり物わかりがいいのもムカつくわね…… 私に魅力がないわけじゃないから、ただのへタレなのね」

「ほつとけ」

「手くらいなら…… 握つても…… いいのよ」

かわいすぎるんですがこの猫！ 今すぐ…… お持ち帰りしてえ！
でも…… うちの茶トラとは相性が悪そうだしなあ……

「何からくでも無いことを考えている顔ね…… ちょっとは素直に喜びなさいよ…… ほ、ほら」

ああ、やつぱり照れてやがるんだな…… ふと、既視感が脳裏をよぎる…… あの時、ひょっとして…… あいつも……。

「い、いや…… その…… 手、くらいでつてのもなん、恥ずかつ」

「…… どれだけヘタレなの…… 貴方」

るせえ！ 純朴な高校生を舐めるな！

「まあ、いいわ…… 今更焦ることもないし…… ね」

「う、うむ。こつこつのは雰囲気がだな」

「じゃあ、そうね…… こつしましよう。一つ、相談があるのだけれど…… 聞いてくれる？ それを叶えてくれたら…… ね」

是非もない…… 聞くが、おまえの言つ事なら…… 何だってな。

「あの…… ね」

黒猫が俺の手のひらに、自分の手のひらを重ねてきて…… 体をすり寄せてきた。本当の猫がするみたいに、目を閉じて肩を寄せ…… それから俺の耳元で「相談」を、そつとつぶやいた。

「つむ……やはり俺には黒猫愛が足りないよつで、電波が上手く受信できない……」こは……恥を忍んで敵陣の黒猫キャラスレに入すべきか……でも、ボツコボコにされて簾巻きにされて捨てられそうだしな……「つむ。

つか、アニメ一期決定の噂で死にそうだよママン……一期なんて地味子死亡のお知らせじやねえか！ 、（ 、 、 ）ノウワーンはあ……いや、でも頑張ろう。まだ三分の一も来てないんだつ！

第2章 3（前書き）

また地味子さんがないねえ……でも、明後日の放映ではちょっとだけだけ……
多分最後だけどー！ 出番があるぜ！ ばんぢやーい！
さて……頑張つて続きを書こう。

俺が黒猫に返事をしてさらに数日後……俺は合宿から戻ってきた桐乃と一緒に

に、再び渋谷へとやって来ていた。この間の事もあるし、なんであつさり？

と思わなくもないのだが……桐乃の方は何事もなかつたかのよつて平然として

いるので、こちらからわざわざ地雷を踏みに行くこともないだろ？
「相変わらずここはすげーな、俺はやっぱ落ち着かん」

「相変わらずのかつぺなのは分かつてるから、脱かつぺのために来たんじょ？ かつペ」

「三回も繰り返すなよ」

「うるさいわね……あんたがキヨドつてると、あたしの方まで恥ずかしいから近寄らないで」

……とまあ相変わらずの調子で、仲良くなつたといつわけでもないのだが。

「だいたい頼んできたのあんたでしょ？ 『どうじょつもなく惨めでダサイ服しか持つていない私をお助け下せ』って、泣きながらすがつてきたんじやん」

「記憶を捏造すんなよ！？」 確かに頼んだのは俺だけどさー！」

「はいはい、とつとと行くわよ……あんたのために合宿あけの忙しいスケジュールを空けたげたんだから、無駄にしないでよね」

「へいへい……つたく。どーせ俺はユニークロが半分占めてるような男ですよ」

自分の服に使える小遣いなんてもうつたの最近だぞ？ ビビの高

校生がブランド服買い漁れるつてんだよ、そらおまえみたいなモテルで稼いでるような奴ならともかくな……と、さつきまでは思つていたのだが、ここに来て意識してみると、周りは明らかにそういう分かる服やブランドの小物やバッグで武装した

精兵ばかりで……自分の残念さを思い知らされてしまう。セレヒ

の桐乃のトドメですよ、もう自信なくすね！

「……ヨニクロだって、バカにしたもんじゃないわよ、無地が多いから使いやすいし、最近はそれほど縫製や生地も悪くない」

あら、意外。おまえそういうのバカにしてると思つてたよ。

「あ、そりなんだ」

「あたしは使わないけどね……インナーに使うとか、ちょっとイジればそれなりよ。何年も前のブランドものをコレコレにするまで着るよつずっとマシ」

「へー、じゃあ今までのでも良いのか。つーかブランド物つて長く使えるから良い物なんじゃないの？ よく聞ひじやん」

俺だつてそのくらいの知識は持つてゐる、と主張してゐる。

「アンタのは論外よ、洗い晒しじやん。それに長く使えるブランド物つてのはまた別なの、そういうのは中高生が買えるような値段じゃないし、使い方やメンテも難しいのよ。私の見る限り、二十歳前で味の出たブランド物を使ってる人なんてほとんど居ないわ」

「ふーん、ブランド物なら良いって訳じゃないんだ」

「……そりよ、安くたつて良い物はある。使い方や着方、本人の姿勢一つで全然違うのよ」

「なるほど、勉強になる」

「……もつといわ、あんたに言つても分かつてないだらつて、ひとつ次行くわよ」

相変わらずファッショングの事になると饒舌だな。アニメやエロゲの事でもそうだけど……こいつ本当に洒落のことも、ゲームや……それ以外のことも、全部が同じくらこに好きなんだろ。それこそ『同じくらこ』に。散々な言われようだが、恥を忍んで頼んでみ

て良かつたな……と、心の中で黒猫に感謝した。

「あ、今回こいつと一緒に街に来たのには訳がある。もちろん、今言つたように『俺の服を見繕つて貰う……』といつのも理由の一つではあるが、黒猫に頼まれた『クエスト』も果たさなきやいけない。あの日、俺が黒猫に返事をして、俺達が恋人同士になつたその日に公園で黒猫が囁いた『お願い』の内容はこうだ。

「あの女 貴方の妹が普段服を選ぶショップを見てきて頂戴。」

「それがあなたの『クエスト』よ」

黒猫はそう言つた。クエストってドラクエのあれかな……「使命」とかそんなんだけ。

「そんなの、桐乃に直接頼めばいいんじゃないか、この間の服も桐乃に頼んだんだろ?」

「そ、そうだけれど……できれば自分……と、でも、選んでみたいの。でも、私はああいうお店のことに詳しくないし……その、また……」

「? どうした?」

「…………Hロゲの服を着せられたら…………」

「ああ……そ、そうだな……」

妹が迷惑をかけた……心の底からスマン……。似合つてたし、あいつも悪気はなかつただろうが……嫌だよなあ、やっぱり。世の中には、エロゲやアニメキャラの名前を子供につけたりする親も居るそうだが、どんな綺麗な名前だろうとその由来を知つたなら、グレてもおかしくない……俺なら3日くらい田村さん家に逃げ込むよ……。

でも似合つてたのにな……あれから着てないと思つたらそれが理由か、白猫がもう見られないかと思つとけよつと……ちつよとだけガツカリだ。

「わかった、そういう理由なら聞いておく……あ、でも直接聞くのは変だな」

「そうね……それじゃあ『大学』レビューしたいからカツコトイ服を一緒に見繕つてくれ『なんてどう?』」

「俺つて『レビュー』が必要なのかなよ……といつか妹にそんなこと頼む俺が痛々しい!」

「あら、私は楽しいわよ。想像するだけで……笑いが止まらないわ。酷薄な笑みを浮かべて俺を見上げる黒猫……こ、ここつ……」

「でもなあ……多分無理じゃないかな」

「無理つて? そんなに難しい任務かしり」

「いや、そうじゃなくてさ……この間ちつよとその、喧嘩みたいな事になっちゃつてさ、あれから口聞いてない」

そのまま合宿に戻つたみたいだしな……結局、ろくに顔も見ていない。しかも事が事だけに……ちよつとやせつとじや許してはくれないだろ?」

「いつもの事じゃない」

「いや、その……今回は流石にあいつの顔が見られないし……会わせる顔もない……ど、どうした」

見れば、黒猫が目を見開き、ワナワナと肩をふるわせている……。

「ま……まさか……あ、貴方たちどうと?」

「ん? いや、主な原因は俺のせいじゃなくてな」

赤城のバカのせーだよな、どう考へても。

「んなつ……ま、まさか……あの女から仕掛けたといつの? よ、予想外だわ……い、いくらなんでも……」

「いや、いきなり部屋に来たのは確かだけどな、俺も寝ぼけて油断してたし」

「ね……寝てているところを襲われたとつ!?」

エクスクラメーションマーク付きのセリフは珍しい、よほど驚かせてしまつたか? でも、あんま詳しく話せないしな……一応、瀬菜とかの耳に入るまではいし。

「ん、まあ……それで、泣かせて噛みつかれて散々だつたよ……ほ
ら、まだ傷が治らない……黒猫さん？ もしもし？」

ら、まだ傷が治らない……黒猫さん？　もしもし？」

なんか様子がおかしいな、ああ……でもこないだ喧嘩したところだ
し、打ち上げでむちやんと仲直りできたかつつーと、ちょっと離
いもんな。

——そ、それで、最後は、どうなったの？」

「ん、いや泣かれたし嘔まれたしで、そのすぐ後に土下座して平謝りして……一応許してもらつた」

「そう……た、大変だつたわね」「あう、散々だつた」

「…………さ…………最後までは…………つたのね…………良か

「何か言つた?」

「な、なんでもないわ。……大丈夫よ。……安心しなさい。あの子はあなたの頼みなら断らないはずよ」

ええ～～…… そうかなあ～～？ …… たつた5分ばかりの相談
だつて、すつすつつつごい大変だつたんだぜ…… 弁護士の窓口相談
だつてもうちつよと敷居が低いつつーの…… 行つたこと無いけど。
そら、こんだけあいつのために頑張つてるんだし、ちよつとくらいい
俺の言うこと聞いてくれても良くね？ とは

や駄目だな、うん。

「まあ、一応頼んでみるが、でも駄目だつたら「メンな」

「大丈夫よ……なんなら、また呪いをかけてあげましょうか？」

「さへおもてこみ。いざ」

なんでつ！ そんな殺生なつ！

「そ、そんなあからさまに落ち込まないで頂戴……任務達成の暁に

「マジでっ！」
は、その……褒美を授けなくもないから

「……前向きに善処したいと思つた。それに、多分あの子は断らなければいいわよ」

「やうかなあ……」

「まあ…… そんな理由もあつて一応「ムリダコナー」と思
いながらも

「今度、服選びたいから付き合つてくれ?」

「…………」

「………… いつよ…… 忙しいんだから、あんま時間取れな
いけど」

「………… つて、意外なほどあつさりオーケーしやがつたんだよな、『コイツ。
まあ、仮頂面は相変わらずだつたけど…… その上「お昼とか全部あ
んた持ちだかんね』ときたもんだ。そのくらいならおやすい御用、
と臨時収入（結局、赤城と瀬菜2号の宿泊費は2万に負けてやつた）
もあつて安請け合いしたが……」

「しかし、意外と高いな」

「そりかね、レディースに比べたら、メンズは安いよ?」

「………… これで安いのか…… 以前『コイツ』と『』に来たときも思つたが、
ちゃんととした服つて高いんだな……。周りの連中は一体どんな風に
して揃えてるんだろ?、やつぱバイトか。

「ふうん…… そんなもんか。あ、これとがどうだ?」

「手近にあつた服を1着取つてみる。色こそ地味だが、周りの奴ら
がこんな雰囲気の服を着てるし…… アリじゃね?」

「論外」

「バツサリだな! 流行っぽいのに……」

「流行つてるつて言つても、みんなが着るよつになつたらもう終わ
りよ。そもそもあんた、自分に似合うがどうかとか考えずに周りの
人間の真似したか、一夜漬けでファッション誌見て、その中で大人
しそうなの選んだだけでしょ?」

「おまえまた俺の部屋漁つたの!?」

メンズノンノは今朝出かける前にダンボールの中にしまったはずだ！

「……まさかホントに履だとま思わなかつたけど……まあ、その辺がせいぜいよね」

「ひつ……そつまかうひナビや、周りの連中だつてそんな服に金かけてるやつこないぜ？」

「そりや、あんたの周りがそつなんでしょ。あたしの周りは違うし「あやせとかおまえと比べられてもな」

「何、妹の友達を普通に呼び捨てにこいつのよ……キモ……まあかと愚ひナビ」

「……こやつ！ それは断じてない！」

「こつうか瞬殺されたし！ 無理だし！」

「……なら良いけど……そつよね、そもそも着替されてたくらいいだし」

「そりつと俺の傷を抉るな」

「だいいち、なんでそんな事になるのよ？ そもそも勝手にメアド交換とかあり得なくない？」

「何度も繰り返すが、交換しようと言つてきたのはあいつだ」

「まあ、いいわよ……そういう事にしておいてあげる」

「本當なんだが……まあ、おまえが思つてるよつた理由ではなかつたけど……誠に遺憾ながら。

「これ、ちよつと着てみて」

「ん……おい、派手じゃないか？」

「あんたみたいな地味なのは、それくらいの方が良いのよ……ほり、こいつのジャケットと合わせてみて」

「こいつの暑いのに？」

「そり、こいはクーラー効いてるナビや。

「……まさか……と思ひナビ、今更夏物を買おうと思つてたの？」

「え……だ、駄目？」

な、なんか……怒りでも……諦観でもない……憐れまれている気
がするぜ! つー!

「で、でもホラ、今なら夏物がセールだし」

麻奈実とか、毎年大喜びで買い物行つてゐるぞ。……たまに「これ、きょうつちゃんと似合ひと思つて」とかつて変なTシャツ買って来るのが微妙だけだ。

着回しのきく物や定番ならそれでも良いけど

「う、すまん。今日はおまえの見立てに任せんんだつた、頼むよ」
ヒロで機嫌を損ねられたまらん。……「」優美のためにも踏ん

「……………とりあえず、羽織るだけしてみて、
張らないとな。

「ウイー」

11

גָּמְנִי

「.....と どうも、おめでたそ！」

「だから俺もそつ思つたよー? なんでわざわざ追撃ちー。」

「ちつ……つむぎわね……」

少しくらいのことは、かかって褒められて何ひる父
イフだし！

「あと、予算も……これ、一着で二万とかするんだけど」「ううんもっせーばー

「そんなもんでしょう？」
さつきも思つたけど、これつて絶対素で言つてるよな……金錢感

「その…………もうひとつ無理な工事で頼む
「バイトくらいしないよ貧乏人」

「受験生に何を言つんだおまえは、ただでさえ今年の夏は同人誌作りやら部活で忙しかつたというのに」

「全力でヘラヘラしてたくせに、黒いのとかと写真撮つて一いやーんしてたじゅん

う……そう言わると痛い……というか、俺まだ言ってないんだ

よな……黒猫とのこと。今の「ひかで」でおかないこと、やつぱ黙田だよな。

「なあ桐乃」

「じゃあ、じつち着てみて。これならあなたにも……合つた服」
「お、おひ」

まあ、今このじつ事もないか……と渡された薄手のジャケットを羽織つてみる。そのまま鏡の前に立つと……我ながら、なんだか服に着られてこよぶな感じだ。

「……」

「おこ」

「…………」

「……」

真剣だな……じつ、やつぱファッショントリートは妥協しないんだよな……黒猫に頼まれたからとか、そういうのを抜きにしても頼んで正解だつたかもしれん。ただ、できれば俺の財布の中身も考慮してくれると助かるんだが。

「ちつよと待つて」

「お、おい。これはいいのか?」

「そのまま持つて」

「あ、ああ……」

鏡の前で所在を無くした俺を放置したまま、棚の方へ向かつた桐乃がシャツやらを色々と選んでいる。情けない話だが……置いて行かれた幼子のようでものすく心細い。……仕方ねーだろ……苦手なもんは苦手なんだよー。

「ほら、これも着てみて……つて何してるのよ」

「ん、いや……別に」

お、おかしかったか? 自然に服を選んでたつもつだつたんだけど……。

「あんまりオロオロしないでよ、みつともない」

「そ……そこまで言わんでも」

「いいから、はい試着室はあつた。早く着てきて」

「へいへい……つたく」

ちつとも感心して損したぜ……これ、着るのか……なんかサイズ小さくないか?……あ、合ってるのか……今の服つて細身がおおいのな。

「できた?」

「ちょ、おじつ! 観くなよ!」

「良いじゃない、別に減るもんじやなし。つかあなたの貧相な体見てもなんにも嬉しくないし」

「良くねえよ! ? おまえは見られても平氣なの! ?」

「あ、リアが来たときのこと思い出しちゃつたじゃねえか! ……つたく、つか、なんでおまえが赤くなつてるんだよ! ……」

「な……何思い出してんのよ……まさかあんた……」

「ないから!」

「……まあいいわ、そのまま後ろ向いて」

「……? お?」

「言われるままに後ろを向ぐ。つーか一人で入ると狭いなあ……つておい!」

「……何よ」

「い……こや……き、桐乃……さん?」

お……思わず妹をさん付けで呼んじやつたぜ……だが……今、俺の妹がやっている行為を見れば、俺の驚きを諸君にも分かつていただけるはずだ……。なぜなら……桐乃が、この狭い試着室の中で……俺に後ろから抱きついているつツ! ……あ、有り得んつ……! 「なつ……なに誤解してんのよ! ……」

「いや、誤解も何も、俺を後ろから抱きしめてるのつておまえだよな……?」

「ち……違うわよつ! 胸囲を測つてただけなのに変な誤解すんなつ……!」

「へ……きよ、きよう?」

「……な……なんだと思ったのよ、あんた……」

「い、いやその、いいから、離れるよ……暑いって」

「つか背中になんか当たつてんだよバカ！ あとおまえ、い……

意外と……。

「意外とあるのね」

「おうえつ！？」

「何壊れてんのよ……太つた？」

「ち、違……そなうそなうと先に……」

「つか離れる！ 海綿体が危険だ！ 匂いとか！ 倭落ち着いて死ね！」

「……もうワンサイズ上ね。そのまま待つていい、いや……もう勘弁してくれ……胸囲くらい、メジャーで測つて来ときや良かつたぜ……。冷や汗を拭つていると、いかにもな営業スマイルを貼り付けた店員が接近してきた。

「彼女さん、すごい美人ですね～！ あ、こちりよろしいですか？」

「あ、はい……いや、あいは

「少し小さかつたジャケットを脱いで店員に手渡す。直しもすぐできますんで、言つてくださいね」

「あ……はい」

「うーむ、やっぱり恋人に見えてたりするんだろうか。訂正し損ねてたのを見られたら、また桐乃にキモがられるな。

「何やつてんの？」

「……っ！ いえっ、何も！」

「ふん、まあいいけど……サイズ違い無かつたから、次行くわよ京介」

「え、おい

試着するだけして買わずにいられるつてのが凄いなー。麻奈実とかだったら上から下まで一揃い買わされてるぜ。もつとも、あいつはそうやって色々おしゃべりしながら買うのが好きみたいだからいいけどさ。……てか、今「京介」って呼ばなかつた？

「なあ、桐乃……もうこないだみたいな恋人偽装はしなくて良いんだろ？」

「……！ う、うつかりしてたのよ！ 何反応してるのよ、バカじやん？」

何赤くなつてるんだか、おまえの方がバカっぽいつてーの。

「へいへい」

「こいつではテキターに話合わせとかばいの、いちいち訂正するのが面倒でしょと、とにかく……言つてみただけよ！ こないだのくせが残つてただけ！ だいたい何よー 黒いのに『兄さん』とか呼ばせてニヤニヤしてたくせに！」

「おい、そんなおまえ……いつの話だよ……」

そんな怒ることかよ、あいつがおまえをからかうためだけにやつてたのは分かるけどわ……多分……まあ突つ込んだら怒るとは思つたけどよ、なんかムズムズすんだよ……こないだの事もあるし。「こんなところ来るのカップルしかいないんだから……いちいち訂正しなくても良いわよ……向こいつだって挨拶代わりに言つてるだけなんだから。こいつ所でわざわざ『彼女じゅあります』なんて訂正してたらウザいだけだから、テキターに話合わせときやいーのよ」「別に、おまえがいいなら良いけどさ」

こないだあんだけ気持ち悪がつてたくせに理不尽なやつだ……そんなんに面倒くさいかね。あとやつぱり見られてたか……そら機嫌も悪くなるよな。

「忙しいんだから、次行くわよ」

「分かった、それはそうと、おまえは良いのか？ 服とか見なくて忘れかけてたけど、黒猫に頼まれた調査もしつかりやつとかないとな。

「え……うん、先にあんたの終わらせと……と思つてたケド……見に行つても良い？」

「別に良いよ、俺は急がないし」

「ん、分かった……じゃあ、行こつか

「おう、任せる

良い笑顔だなー、秋葉原でフイギュアに目を輝かせてたときと全く一緒だよ。やっぱ、お洒落もアニメも、みんな揃つての桐乃なんだな……と改めて思う。それから、フロアを移動してレディースのショップに移動したわけだが……。

なんていつのかな……ほら、いつ……凄え場違い感……前に一緒にクリスマス取材をしたときも感じたけど……やっぱ住む世界が違うな。麻奈実と一緒にデパート回るときなんかは、まだマシなんだが……同じ女性服でもフロアが違うだけでこうも違うとは……下着売り場や化粧品コーナーのように、息を止めて走り抜けたくない感覚だぜ。

昔家族でデパートとか出かけたときの親父もこんな気持ちだつたのかな……そら逃げるわ！ 普段厳しい親父がずいぶん優しいと思つてたんだ……デパートの屋上では小遣いまでくれるし……つかこの年で父親の気持ちが分かつちゃう俺も大概だよな。

۷

あれ、あつさり開放されたな……いや、束縛されたかつた訳じやないけどさ。これが麻奈実とかだと「きょううちやん、これとこれ、どっちがいいかなあ?」とかしつこいのに、しかもあいつ何言っても「じゃあそーする~」ばつかだしな。なんか張り合ひがない。ま

「アンタのセンスとか期待してないから」

……「イソよりはマシだな、うん。店を出たところのチエストに座つていると、店員さんが「一スターに乗せた麦茶を持ってきてくれた。

御田の山と川

やつぱそつ見えるんだな、まあ……一緒に服を選びに来る兄妹と

が、あんまないよな。認めたくはないが、傍から見ればぞー見たつて『データだし』。……どつかの変態不良債権兄妹はともかくとして。

……そんなことを考えながらぼーっとして麦茶をちびちびと飲んでくると、30分ほどで買い物を終えた桐乃が店から出てきた。てかおい……

「へつへーー セール品に良いのがあつたんだ! らつき」「機嫌だなおい……さつき俺、セール品について突っ込まれた気がするけれど、それ言つちや駄目なんだろうな。

「なあ…… 買い過ぎじゃないのか?」

「え? 大丈夫だよ? 安かつたし、今日は荷物持ちこるし」

「それ俺だよね! ?」

文句を言いながらも反射的に受け取つたけど……こいついか締めなきやいかんよな、絶対。俺の布団に間違つて潜り込んできたところを狙つて蹴り出すしかない。……まずそのシチュエーションがないけど。

「じゃ、今度は……」

「まだ買つのかよ! ?」

結局……その後も何軒か店を回り、桐乃のお皿当てを巡回し終える頃には、俺の両手はすっかりふさがつてしまつていた。指に持ち手が食い込んで痛えよ。布のくせに重いってどんだけ……。

「なあ…… おい、俺の服もそろそろ買いたいんだが」

「ああ、そうだつた。忘れてたわ…… ジヤあ喉渴いたから先にお茶」「『ジヤあ』の使い方が間違つてないかおまえ! ?」

「うるさいな…… あんたが頼んできたんだから、あたしの希望が優先されて当然でしょ、文句言つなら先に帰れば

「……つたく、分かつたよ」

ちよつとは可愛げが出てきたかと思つたけど、全つ然! 変わつてないよな……。とは言え、俺も疲れたしちよつと座つて休みたいのは確か。

「お、ここなんかどうだ」

「いいんじゃない？」

「あら、一発オーケーは珍しい……。案内板で見て一番近いカフェを選んだだけなのに文句がないとは思わなかつた。まあ、こういう建物に入つているだけあつて、見かけるショップやらがどれもこれもお洒落っぽいし、平均以上の店なんだらう。実際今入つたこゝも、モノトーンと暗い木目で統一されてすつきりした……といふか綺麗すぎて落ち着かないくらいに洒落た店構えだ。

「ふー、疲れた……おい、メニュー取つてくれ」

「今あたしが見てるんだけど……普通こゝにうつ時つて、女の子に先に選ばせない？」

「知るか、なんでもいいからさつさと決めて見せろ」

「あんたがモテない理由が分かつた気がする」

「ほつとけよ！ つうか……あんな……」

「うーん、これは、今言つとく流れだよな。一応、その……こいつのお陰で黒猫と知り合つて……俺の友達だつたといつ前に、こいつの親友だつたんだし。」

「なあ、桐乃」

「……何よ」

「その……黒猫のことなんだけど」

「……何よ、あの黒いのがどうかしたつての、自分の彼女なんだから、いちいちあたしに聞かないでよね」

「余計なお世話だ、頼るような事は……つてなんで知つてんだ？」

「なんであつて……黒いのから聞いたに決まつてるじゃない」

「あ……あーそう……な、なんか拍子抜け過ぎる……こいつはビデオ言つたもんかなーとか、ずっと悩んでたのに。……てか黒猫も、言つたなら言つたで教えてくれればいいのに……。

「き、聞いてたんなら言えよ……」

「なんでいちいち、あたしがあんたのコイバナとかに付き合わなきゃいけないのよ、バカみたい。そんなの……絶対有り得ないから」

「分かつたよ、おまえにや聞かねーよ。ぜつてーに」

くそ、なんか俺がバカみてーじゃないか。しかも露骨に不機嫌だし……前にも思つたけど、ホントに……ある意味仲が良いよな。俺に嫉妬するくらいとはね……。

「『注文はお決まりですか？』

「あ、あたしはアイスモカチーノ、あんたは？」

店員さんがお冷やをトレーに乗せてやつて來た。つうか俺、まだメニュー見てないんだけど……。

「え、い、いや……その……ホットで」

「かしこまりました」

うわ、この暑いうえに喉渴いてるのにホット頼んじまつた……さつき飲んだ麦茶だけじゃ足りないのに……後でお冷やのお代わりもらつか。

「ホットねえ……」この暑いのに

「つるせえ、おまえがメニューとつと渡してくれればこんな事にならなかつたんだよ、俺だつて冷たいのが良かつたんだ」

「うわ、女の子のせいにしてる、サイテー」

何その目ー どんだけ理不尽なんだよー つうか妹は「女の子」に入れないだろフツー。

はあ……もういいや、黒猫に頼まれた依頼はもう大方達成したし……とつとと帰ろう。……いや、あと、一個だけ頼んでみるか……これだけは……俺のセンスじゃどうにもならんし……。

「お待たせしました、アイスモカチーノとブレンドです。『注文は以上で宜しいでしょうか？』

「はい」

「おひ」

……んー……やっぱ夏にホットは微妙だな。なんだつけ？ 桐乃が頼んだやつ、はやつてんのかな。

「なあ、それ美味しいの？」

「……つー? な……何よ! あ、あげないわよ」

……そ、そこまで。

「い、いや聞いてみただけなんだが」

「ど、どうしてもって言つんなら……一口だけよ?」

「?いや、別にいいや……あ、お冷やお代わりください」

ちょうど通りかかったウエイトレスさんを呼び止めてお代わりを頼む。さつき「コーヒー」が来たとき元氣でに頼めば良かつたのに、一度手間せちゃつたな。

「……でなんだっけか」

「……別に、あんたの注文センスの無さに呆れてただけ」

「ほつとけよ」

「黒いのどドートするとき……大丈夫なの?」

それこそ余計なお世話だ、おまえが心配する」とじやねえよ……

だが、ここは我慢だ。

「まあ、何とかなるだろ……それより、もう一件だけ頼みがあるんだが」

「……何よ」

「うわ! 露骨に嫌そうだね! どんだけ面倒くさいんだよ……。

「いや、そのせつかく……付き合い始めたわけだしさ……なんかプレゼントとかしたいな、と思つてぞ」

「ふうん……あんたにしちや気が利いてるじやん」

「まあ、それで……アクセとか、選ぶの手伝ってくれたらな……と思つて」

「……別にいいケド……」

あれ、良いんだ。これまたあつやつ……俺のこれまでの努力、妹にちょっとは届いてた?

「助かる、流石に年頃の女の子の好みとか分かんなくて……」

「年頃って言い方が既におっさんよね。まあ、地味子のが伝染つて、あんたまで年寄り臭くなつちつやたのはじょうがないか

「あいつは関係ないだろ」

やつぱり麻奈実のことが嫌いなんだな……心底、相性が悪いんだゆう……そもそも、生き方が違うすぎる。あやせから見たオタク達

と一緒に、生きている世界が別だしな。

「ほつとけよ、どうでもいいだろ。……でもまあ、服やアクセ選びに付き合つてくれるのは正直助かるよ」

「黒いのは……あたしの友達なんだから、……良いやつだから、別れないでよ」

「言われるまでもねえ」

結局、仲が良いよな……おまえ達。そんなに心配しなくて、大事にするよ。

「ちょっとぐらい嫌なことがあつても我慢しなよ」

「へいへい」

「でも、どうしても、どうしても……どうしても駄目だつたら……別れてもいいけど」

「そこまで念を押さなくとも、大丈夫だよ……つたく

どんだけ信用無いんだ俺。

「今日もね、前に……だいぶ前だけど、黒いのから言われたのもあつたのよ、あんたのビーしょひもない服装をどうにかしてあげたらって」

「ああ……そういうことか」

なるほど、黒猫が言つていた「大丈夫」ってのはそういう事か。助かるけど、そこまでするなら素直に頼めばいいのに……。つか、彼女……ひょっとしたら告白前かもしれないけど、その相手から服の駄目だしされてたつて……桐乃にボロクソ言われるより落ち込むな……。麻奈実とかには、そういう風にストレートな駄目だしを言われたことがないだけに、余計だわ。……まあ、あいつはあいつで……ナチュラルに「うーん、それは似合わないかな」とかって地味い～に俺のボディを打つんだけど。

「で、どこいくの？　ここの中にも何軒があるけど」

「ん、この間……と言つても、もう一年近く前か。おまえが連れて行つてくれたアクセのショップあつただろ？」

「……え……」

「あそこ、値段も手頃でセンス良かつたし、俺の予算でもいけそ
だから、また連れてつてくれよ」

「一人じゃ入りにくいし……うあー、コーヒーまだ熱いな。

「……ふうん、でも……遠いから面倒だしやだ

「そんな遠かつたっけか。

「うーん、でもあっこ良さげだつたんだよなあ、黒猫に似合いそ
なのもあつたと思つし。ここにある店のつて、どっちかと言つとお
まえやあやせに似合いそうなのが多いし

「そうかも……ね」

「後で良いから、まだ買い物あるなら付き合つし」

「ううん、もういい……ちょっと疲れたし」

荷物持つてる俺もけつこう疲れたんだけどな。

「そか……大丈夫か？」

「疲れたから帰る」

それだけ言つて桐乃はいきなり立ち上がり、俺の隣に置いてあつ
た紙袋をまとめて掴むと、止める間もなく桐乃は店を出て行つた。
テーブルに……飲みかけのモカなんとかを残したままで。追いか
けようかとも思つたが、伝票も会計もまだだし、もう追いつけない
だろう。なんだよあいつ……また急に機嫌損ねやがつて……やっぱ
こないだの一件、まだ怒つてたのか……もしくは、本当に疲れてた
のかもしれないな。

……だとしたら、無理に頼んで悪いことをしたかもしない。憎
まれ口に紛れていたけれど、風邪が治つたばかりで陸上部の合宿に
参加して帰つてきたばかりだった訳だし。

「よし」

たまには兄貴らしさることでもしてやるか……そんな事を思いなが
ら、まだ熱いコーヒーを急いで飲み干す。つーか、今の俺つて、ど
一見ても痴話げんかで置いていかれたみたいだもんな……全く、扱
いにいく妹を持つと苦労するぜ。

ネタくれたスレ民ありがとー！ 次からは絶対地味子さん無双！

桐乃がちつよと可哀相になつてきたので、桐乃ファンの人は
「ごめん……なんか……どのキャラも泣いて欲しくないんだけどな……
うーん……」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2343p/>

俺の妹がこんなに可愛いわけがない 8巻っぽいの (地味子編)

2010年12月11日00時42分発行